

芭蕉翁附合集評註 上

5  
1502  
1





へり  
利  
門  
瑞  
卷  
1502  
1

依 借 の つ け 句 を さ ま ら ぐ む と 思 ふ  
ま の ち 若 々 意 心 相 の つ け 句 を と む  
だ し 若 々 意 心 相 の つ け 句 を と む  
ま の ち 若 々 意 心 相 の つ け 句 を と む  
ま の ち 若 々 意 心 相 の つ け 句 を と む  
ま の ち 若 々 意 心 相 の つ け 句 を と む  
ま の ち 若 々 意 心 相 の つ け 句 を と む  
ま の ち 若 々 意 心 相 の つ け 句 を と む  
ま の ち 若 々 意 心 相 の つ け 句 を と む  
ま の ち 若 々 意 心 相 の つ け 句 を と む

附合



おぼがつたよその附合集をるるは  
ちちあさきぞつらふまの評注たか  
たかあまのまのこころを志するは  
べしかりが依譜よ若くは古きは  
まきをひらきまじるべしけが辭  
たまたまどくらくらひかたけとらまは  
ふを因づくさるるち用屋車と解

芭蕉公附合集集評注上卷

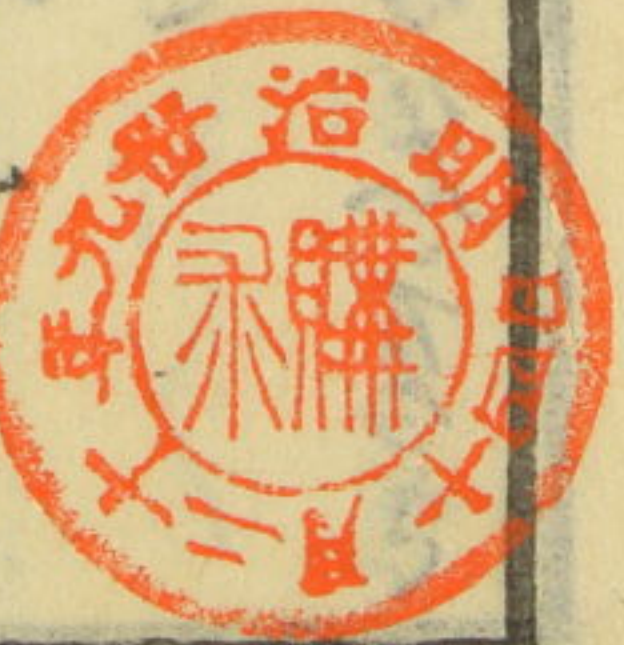
瓶の記

二十五条曰瓶ハ発句の余情と氣をこの  
面ふくなるやうにまじり瓶のまがら  
持てる瓶のうらまはあらざ

酒債尋常往不在

人生七十古來稀

詩のまをむとまをむさなる酒債ハ  
冬 湖日く水く馬よハスル 鯉コイ  
発句詩商人といひ酒債といひ詩人誼





流の何りさほをのぞくをさくけくを  
漱と音ましく用ひるよのまゝの裡と漢  
白のまぎらつくりて吾れ句の余格を  
何らハ一たりはれどとれハみな一粟の  
依格として又一神あり公卿いさぐて正凡  
のまゝ面目をばらぬざる時のたゞいふれ  
ハ常格とまぎら

霜月や鶴カウのつづくあらびかて

冬の初日乃何り水ありりて

は眼ハ赤とふ人のかごとまゝる名高き

秀逸あり冬のりき二句の間ふらるが  
ぬし升とて冬の日は解よふの誤く  
あふを解きる時を却て亦二条も前  
はとつらるよき注とつらぬし大凡  
ものぬとつらいつらいつらいつらいつら  
いひたらるものよ何ら口をいさだか  
あつらひたがふものあり公卿しこの冬  
の白乃依格ふつらいつらいつらいつら  
のまゝ的をばらぬるよやまのまゝは  
眼何りされどつらいつらいつらいつら



あふ小バ卷中まゝ古流の体真此流  
 ありきもの之はてその流體のつくく  
 ちあらびぬくと句づらり此酒流なるふ  
 韻字イムジふてもあむて何り小あふりりとい  
 ひほしたるこ小を流のま体とい  
 ふろもく流才三ふまはり子の三体  
 何るゆりわが師軍更りきけるる有  
 る小祭句ハ天りてかちちあれたもの  
 なる流ハ地りてのまゝるるをとり

はどり才三ハ人やしく新くことをつこ  
 ざる流ハのまゝるるをとりはどりて新く  
 づるるをむねとまゝるものなるバまゝり  
 と新くづる韻字をもちるるるを本  
 式とて本式ハまゝるるハちま体るり新く  
 まゝまゝもの、新くハ異式なるバは流  
 のめくありりり或ハありりるるなどの  
 もとも新くかなもてるるハその新く  
 又ハ流を風吹のたぐひ韻字も假  
 名とも字をらぐるハ行新あり才三ハ



加筆 此  
紙といやかりりし部くるみをつらちとる  
あふ部くがな式をうり中もてふて、  
らむたなどをまら用ゆるものハけかまも  
とも動くがなありし此才三のたの辨  
たつり外の假名ハ行辨説なるるど  
ハるの辨ありけしむら草天地人の  
ことわをまらざれば紙才三よウツ  
あれど極式とつものハかりるだくか  
ハるだうらざるものよてかりればむづら  
かしくぬよありかりらざればみどりこ

世ふ宗道をいひく依借をアキ者  
何よつけの因つつけ借よ秘傳といふ  
をつらりく人をエラ推びく借ふるものハ  
人扱はりて價をむさばらむとての  
まりざなまことハ依借ふ傳よ秘傳  
とつものハたきものこころハ何づらぬ  
よありとてあれどけむら草のよを  
一たりの秘傳のやよいふ者何まきを  
こがまはふいひつ  
檜 せま二雨ヨを入下のやどりふ



穂一つりぬ 口とつてそゆく

飛句 旅 差子 雪をいのちとまざる 風 粒  
の 旅人 小うち 旅く 穂よとつてそゆく  
志とやう 乃けしきを つけたる ちりこ 小  
行 跡の 紙なり

時ハ秋 春 理をこめ 旅のつと

厚をとまぬ 小 平 凡の月

飛句ハ 送 子の 白 ちり 時ハ 時として 秋  
の あり 小よ ねも 乃き 時ハ 不ハ 不 大 和 臥  
此 ゆし さん 何 まさ 一 春 理を ちり けて の

旅 小 水 ば さい ぬ く 何 小 水 なる なる なが の の  
つとも 何 さら ち なる づ しく さら ち なる なる  
ころ 侍 小 と づ 小 なる なる け しく 小 水 なる  
わが 身 生 涯 旅 ちり 旅 小 水 なる なる 旅 丁  
とも 森 なる なる 風 や 流 水 の よう なる なる  
身を 何 小 水 なる なる づ 小 何 なる なる の 紙  
なる なる 丁 を 旅 小 なる なる づ 侍 なる なる  
小 なる なる

江戸 橋 なる なる か よ なる なる 志 なる なる  
薩 嶺 の 雨 相 なる なる か 一 なる なる 月



公おハか一つく江をさ尻あつとよふ  
 しほどの人あまきバ時あくの庭くふ  
 江をバ思ひ出ぬふらむといへるる  
 を時あふ様と志をりくる他へ旅も  
 くのあいつつをけけいふも陸奥の  
 ちあふかつりこるとあふりこれも吉田  
 ちあまきバけけいふハ解しが  
 えろくぬふ恰をめもあおあ陸  
 一おわろるくふるひもむれ  
 きこえるまよてくわく解きふ

及びぬ

時あくふ溢かりまむるの庭  
 火燈のはあふ倦をつぐ人  
 桑向君ハ庭をまてつ、出りぬも  
 門の溢をバリきふか、まぬへ時あ  
 庭くよハ君があまにゆき、はあ  
 をたの、あむと倦人あふらや  
 子供されびよりぬ、あゆとちあ  
 火燈にはあをたき、時あをたの  
 みぬ、つあ、ろあふり、あもあ



分具彦やちゆめと昇下ノボしたるこ徳を  
つぐとハ潔ツヤ鬱ツクのこもバ

芭蕉ハヤシ唯ただ分ぶん其その句くふふ草クサ鞋カブ形かたちは

月と紅菱ベニハシ未ま成なり酒サケののとと名な

其その句くハ公こう羽うの 芭蕉ハヤシ唯ただ分ぶんかか〜〜 鹽シホふ

海うみををささ〜〜 扱あくく〜〜 いたるをを〜〜 け〜

ろろのの句くふふ草クサ鞋カブかか〜〜 け〜〜 やや 倚よの

古ふる酒サケのの一ひと軒けんををれれがが 他た意いいい〜〜 け〜〜 け〜〜

がが〜〜 瓶びんのの月つきとと 瓶びん葉はハハ何なにとと 瓶びんれ

たた〜〜 瓶びん流りゅうよよたたつつ〜〜 瓶びんののとと 瓶びん〜

て何なに〜〜 ものものななりりとと け〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜

芭蕉ハヤシ唯ただ分ぶんかか〜〜 瓶びん句くををたた〜〜 瓶びんかか〜〜

鹽シホよよ海うみををささ〜〜 扱あくく〜〜 け〜〜 け〜〜

句くのの〜〜 一ひとふふ芭蕉ハヤシ唯ただ分ぶんかか〜〜 瓶びん水みづをを不ふ句く

のの〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜 芭蕉ハヤシ唯ただ分ぶんかか〜〜

〜〜 何なにやや 未ま成なりつ〜〜 人ひとたたるる ちちららむむ〜

〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜

どどけけ不ふ〜〜 何なに〜〜 何なにをを見み〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜

〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜 け〜〜

二伯にままぬぬららををむむ西せい川がわななららババ杖づえのの書かき



蒼蒼とあつふ風の破笠

柔句ほいさうさうしつ傍西行してまさば  
あつ宿あねらとむしと向うけるよいや西  
行のめさきさるき振りあすてハ奈  
蒼蒼とやうく風小破水安きさなり  
あけぬる昔よてさうらとさうら  
るぬちなり蒼蒼とあつ風の破笠さ  
へるひびきゆふちやち——柔句もあね  
のさうは西行をうらやめさるるを  
ての化なり

花の咲かたがら草のさるる

秋——はる、篠のくづをれ

柔句ハふるきんをあつさるる他くさの  
材が像儼なる我見く何れは人を  
——世小用ひ——めばみ人のがらふ立  
て園のニツキトあつもあづららむむさき人  
おなるをさるるの中ふからぬくそ  
水けぬふ老のみハちちを——からぎや  
されどろの人まとりくハさるく何れが  
たさちんよさるるたがひなくニツキト



一たるあつろをかくやけく句つらりて子  
の夕細小花の咲くを秋すくあるあつ  
うひなきも秋ハリがむ我人のをうみたる  
にねとろまてこいれうく 和入るる内河  
秋ふ志ふるく蝶のみる 氣もなきく  
づをゆるる赤もあましくとくはくと辞徳  
謙退のこととバあり 化者の句をつくる  
十七字十四字の間ふわざりあたる  
ろけりくく口上をのづるがめー後やな  
ふうくあつろをとく知よ

師の橋むのー拾ハむ木のまが

さくたふせおの <sup>ヒダ</sup> 秋は 四十一  
み花白根とも小吉洞あふ小がきとえがに  
解しゆありとも 冬を血の了りく  
霜の宿乃 詠森は 解屋をまか  
ナ人かやう乃 秋の本がら  
み花白けききせお乃 春ふ志をやまの  
もたのくく時あつらぬ 秋屋をまをまお  
らをもいいうのめげのりつせくねが  
さむとあいきりーたるこまこまふ解屋



をよまきするより何らぬどきんかおのむむる  
ものもなきしとあしきことをうくしむのど  
たのしきついでよその詞をうけてきま  
のきつひろくたぐひあはれおも  
ろきこのよこそ何き古人もかざるな  
つしきさるふつしおぐりしをまじ  
るもこそえさつしとたれとたうよ何  
がしやのつし何りしとつあしをたけ  
れど何れもなきありしはをのべぐるもの  
あざむきのものがぐりなきころかふる

のつし何りし水など深氏物語をよまね  
あしきつるり  
甘きよよ茶碗まで一五三は  
竹立もくしたやさく庭の卯の音  
あけのつしつりつしきききききか  
らききききききききききききき  
ゆききききききききききききき  
とくきききききききききききき  
らむりききききききききききき  
きききききききききききききき

竹立







中をかくくはまぐしの旅ゆつしゆめむ  
がろれほど神もほころびぞ旅ゆつし  
ぬふりもも見えぬちを志ふころといひ  
たぐくはめたるあろえ旅ゆつしをくけく  
いやくた探もごぞらだ旅森のまのまはたき  
ふやうはてまよハ眠をきらきなぬどの  
あくふよおぶさむこころんたも

精飯ヤキや伊ら吉の雪クダもルむ

砂きくりりりがそ乃旅

登れ白けききおくららの旅ハ梅飯も伊

うら吉の雪ハ岩きくむきふめく籠も  
ぬむハぬりりきまのうら又ハをキし  
くもきうらむと傳人の旅をりうら  
あろをうけくもなるまのめく砂  
をふて来くめハきうめとまらた  
る旅ありまなぐく登れ白飯人と白春  
さるがめく或ハ白ゆくハ或ハ人のまぶ  
登れ或ハ人の宿をかしていやくはまハ  
あらぬといふ旅ハ五辨八辨の従何ん  
と登れ白まもと澄およて何のまをいひ



おむもはうら水ぎ 桜ハそ水よ 春さるお  
 ちれば人のことバふかぎり ちのきさぐめくその  
 時くのうらまきまきさぐめく ちのきバ五神ハ  
 神ハ九神十神ありて もてるる だうらぎ  
 ちどきかふる さあなごハぬんの人よあり  
 ふまきけて 志めはまもの なまきバ何あうち  
 にかふる べうらだ  
 いろくの 名もむつ ち春の 叶  
 ちれく 篠ゆ ちるさ ちめぬ  
 隣の 葉神の 根ちり 葉向 根も 何り

のまの ち春く 記評を あうら ちのき  
 け ちあふ 二十五 葉あ ちり あり  
 ね 君守 ふわが 宿せ 葉の 根れ 好屋  
 ち ちんく かなる 風の 葉  
 葉向ハ公 ねま 君守ら 水く ちのき 者を 果下  
 ちたる ちち ちらう ちの 根ハ ちれ ちあり  
 さうら ちの 宿 ちあ おめく ちの 根バ ちん  
 ちんく ちや ちの 風も 葉ちり 涼 ちあふ ち  
 ちの ちめ ちの ちあり 風の ちき もの ち  
 ちの ちの ち依 借 あり



わらうふ林だよまのよ化ま

田 植ともにも 終乃 終起

五音句を田家ふとてあくるちうこの  
ころと終いたゞその地ふをうけり  
るがぬも志づうよ中バからびずや

酒 志ひならうよ 辻ころの月

け酒もてたゞよ八何らう一房がぬのから  
びたるをきうつけたる 李杜が歌に林  
夜蘭ニケナなるまを 酒志ひくる 終らむ終  
のうけうこかくたるまをうにまを

志るも感して みるや 終の田植唄

必之何らた免む 不終のけい

終句ハ終人よあまゆ一うみ度の田植唄  
をきうをむとて 終ハ終をくゆる 必之  
後何何らたむといふあま免みくみく  
りがぬも 終が終の何らとむなき衣  
後もたやうしバ不終の終をるるまはせめ  
て必之あうとも 何らた免むといふとろ  
たは終とて終よまをうかけりは終を世  
不終 終といふみ終といふよ不終と終



田舎のけしきに背けるまこと  
見とばやあせか子をちぎる朝の烟  
ろの糸をささふたをらむゆめがね

これも揚不附くたのけみゆめがね  
つまぎみあふぐらへていらぬあふの  
いつる田舎のけしきは見えぬ

時ぬくや花まで流る 松のま  
宿たれた鶴をとむれりうま

あせかふくやふきとゆ花のけしき  
を見くくちまのあつてはむらさき

あひちちむらたはまで流るく花のま  
まぬまといふくそなたらばまぐよ時ぬて  
やあふれど又い志が水ぐやともまきぬ  
まぐい度く時ぬあふあふる松のま  
植もてもあふまきまふ松のけしき  
はあゆりく朝上げたあふまき  
のくあふたまにげりやあふま  
らむがたぐらぐらてやのかくたぐ  
たきぬあふまをまよたとへくか  
鶴のよるべなき者なとめの子



草のめき人なかりと比喩しく阿のさか  
たるなかり

奥底もなきて冬木の梢も

小春ふ首のうごく心ミナムシ

おれも阿のさかの登白ゆく君と赤の奥  
底もなきて冬木の梢乃めくさきづく  
まじくも見えまじくやうにさかといふん  
さうけて係のわが方をシム謙譲し心ミナムシ  
のやうなるとけうも君が阿のさかの小春  
は阿のさかすれふ首を動かすと子紹と

わきもけびよ梅より奥の叢枝

茶の湯に流る雪のひよ鳥

登白ハ梅もなるとは山本といへるころ  
まじく梅の奥なる叢枝をねど梅  
は凡流ふ阿のさかゆりさうのさきもけびよの  
阿のさかなり流はけびよといふる御より  
茶の湯とつけたのまじく方をひよと  
あうさう

わが梅アイ割サシ 枇杷ビの廣葉ホ

心カケ見ふ動く山花乃花



山

十

あきも 均不 附あきくはさるるをさあ

梅ふえく日永し 梅といつり

東の窓乃 虫葉よつ

桑白いみり一の山のやまさあといむ  
とつら何りく花や咲べきといへる昔水  
院よその清 智のこことバをかりて梅の  
花もちりそし 梅はまご候むはちがれ  
日をいうよくらちむとつあさるる之候はその  
時ふのやんそかふ何りくいさ  
かきしあふは新の候ちり

川ぐくと 榎の花は 神ふちる

ひとり 葉を 梅 之 枝の ひとつ

まことふは 根ちぎら 葉白を たまげるま  
からまきく 飛さよ 何らむ きたんく 根の葉  
トがくは 白のめく ちりさ だし づくと 榎  
の花乃 神ふちる 八 枝の ひとつ 木の葉  
梅ならで 外ふつご ぶやひりり 子字  
つづく 小のく ちりりく ちりり 何り 嘆む  
るに 何まり 何せ

加 葉 ちよ 葉あふさく 春の 友 雀

春

十



秋をこゆるくほらぬの片一枚

こゝれも葉句の何れなりをうつけたるまぢもく  
句をハ明らなり葉句も紙もよの句  
替<sup>トム</sup>替<sup>ボウ</sup>の型をかへる。西日く

改<sup>カ</sup>葉句の種乃く

葉句替替の型をかへるふいさのめ  
浦をこの片例所と身く葉句の種をい  
西日くよ改<sup>カ</sup>葉句の種乃く  
をうつけたるまぢもく葉句も紙もよの句  
を改<sup>カ</sup>葉句の種乃く

女鳥の羽もかいつくろひぬ種一どれ

ひと吹<sup>フ</sup>風の本乃葉まづ中

こゝれも葉句の種乃く  
みも名<sup>ナ</sup>育<sup>イク</sup>を依<sup>ヨ</sup>借<sup>ボク</sup>をいへる人乃  
よくするふありるまぢもく葉句の種乃く  
の法<sup>ホツ</sup>葉<sup>ケ</sup>まづ中  
ことよ風<sup>カゼ</sup>のまぢもく

市<sup>チ</sup>中<sup>チュウ</sup>ハものめらひや夏の月

日<sup>ヒ</sup>者<sup>シヤ</sup>一<sup>ヒト</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ト</sup>川<sup>カハ</sup>く<sup>ク</sup>のまぢ

か<sup>カ</sup>ま<sup>マ</sup>づ<sup>ズ</sup>も<sup>モ</sup>葉<sup>エ</sup>句<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>種<sup>タネ</sup>乃<sup>ニ</sup>く



竹舎  
山

十

たぐ正凡の的くあれはくまのつまをこ  
 ちまきど首の月へ涼しとこう何のま  
 布中のもものまをひちあらば暑うらめか  
 ることつをたぐへおお白をよく見さ  
 欠くまのめく後寒はひささるる  
 涼しとつよハ山家のねあれ  
 灰汁桶のネヤアヤクヒクギクギク  
 使らさるりく音森さく。秋  
 花白シヨウ花ハのシツをシツ見シツくシツねシツ寂シツく  
 莫くの顔モクをつけり灰汁桶のネヤモク

花やめバさりくまの鳴出さ志つらハ使  
 うまりく音森さるるをれものやどり  
 なるるを

芽出より二葉ふさなる柿の葉サキ

畠の花ふかくる卵の花

翁去来が藤杯今ふ滞る毎の時依  
 借ちり花向ハ藤杯舎を顔さるる  
 ねハまむで使場ちり

まき葉の儀も何とや生大根  
 冬けしん籠る小室の葉ス

竹舎

十



花白き葉ふ生大根のとり何八とをう  
た化ありいくのも大根もきき葉もきくら  
むかる家ハかるらむお定はとめてふぐ  
らた小煤の流りりりる山色さのりり  
の古家と見くる流し

春風や春の中ゆく 水の音  
陽あいつむ 花乃らふぐち  
春うと二句の間ふあふりり

葉経干き葉の増やゆめ涼  
心はふいゆー 葉の増やゆめ涼

あゝろこふ二句の趣を巻とバ都を二三里満  
たる在まのまふとふれ字竹たのふがたハ  
ちふささく川ちがれささくーの敷後れた  
てたハ山あふべー 宗の庵ふ葉を巻て  
葉経干たるよそのまはたたりぐくあぬ  
まりてはゆ人の家内の涼いぬさほ  
やがてたのほきまりのちらつくを内  
の子ども乃見つけくーふゆく之葉のた  
るれ敷げふ笑るあふらー

蠅 ちあらふたや初秋の日敷うふ  
海合 上 三十一



首もくろり吹 帷子乃 絞

時々のつけあがり

新妻はつぎとぎとぎと 欠ぬ首 金

まぶお故屋の穴たるよりあがり

係の糸絆の尻まくわくわくの情をう

いふとわくし句あがり

帷子ハ日くふささまぶ 野の春

糸 一升を 縮のこぞと 何又

かごびらのささきはぐくあがり 野の春

しきり子て 新タハよんぞ 涼しきべ

糸もろの時ををゆをく 縮り時をつ

け多りけて 縮のこぞと 何又 糸一升と

よく在子の 粒絆をのべたり 糸のさ

れ公おのはらりとハは句あがり 糸

むべあがり

雨佳 雨れくく 糸ハ海ゆ 望み

秋 秋のやま 糸も 糸とわたりが

ハ海まくく 海子ハまゆ 時粟の粒は

中よりぬつと 糸を 穂のかしらけ 何げた

糸



らむハめけまきこちやをむまべて附合ハ  
二句一首の二句と見るを一といへばは解  
もかく一首のみしとちとみるこ

舞る故小給アセきてあゝの秋きくま  
舞マユるあがらふ足まゝるハジメ 深結フカイ

時ふと場ふとの秋あり  
秋のふれ先くふらむるな

秋小森やうり 秋に森やうり

係の草新ふて甚ニヤラカ洒落の秋あり  
句ハけ先くも秋晩の海邊やうり人里

まゝく家も見えぬやういふ屋だうりやうり

まぎぶーちやうり だ何りさやまあるを凡

舞のひより弦と見くかくハつけるるは

豆マメの花咲かりあり みるの縁ヘリ

水ミヅ鏡カガミ乃けしる 溝ミヅガ川カハ

場ふらるるがめー 正凡のさうたう中なるべー

猿サル美ふまれとる せお乃セオノ松マツ海ウミ八ヤチ

日ハまきりれど 志づうなるるは

花句ハ後舞美何め 時の句なるれば  
その猿美ふたの心も新くせおの松美



海合  
上

まきさぐめーとつよそろをならむり紙もろ  
のころをいつくひたる紙有り

三十三

第三の歌

詩阿きむど年をむけざる河俵

冬 湖 日 々 々 々 馬 小 加 馬 裡

干 紙 ぎ 夷 小 紙 を ゆ ー さ ら む

紙の歌もつるめくこの時ハ中まぐさ風ハ  
入らざりし時なるハのちふ正風のまゝ面目  
をにらしるる時の依借ハ何ひぐささ水  
紙古洞ともみなり 粟 野 ともつ小 白 三 六 桑  
向よりオカ三まぐ漢のまぐさよつらりた  
るなりをまべて古洞ハ漢語詩語などを

海合  
上

三十三



梅舎  
三十三

三十三

多くつらふをめぐりきりしふたたり  
 ると見えたりは水どけ花白ハサノ角ガ世の  
 詩奇に何をぶ人を何をけりたるよて花  
 三もろのころ何れといつりいづちならむ  
 ゆ雪乃こもも袴ハカマもくゆる  
 雨相ふましくも歌於歌のめ  
 聖ミヤさままで尋る蝶の羽をいそ  
 家くの冬の日ほ解まきづらくゆづる  
 水仙ハ目るるを春に花たけり  
 窓の扉目平ひらく葉且

赤猫小のら猫通る 鳴りびく  
 花白ハ水仙ハ冬のもれなきごとくも冬のいそ  
 きよ見るるもあきて春ふなりてころな  
 が欠たまこといふころ花ハ花白ハ葉且の  
 ことハ花あけれど早春と見えく葉且を  
 つけるるちたら花白ハ花きくも葉且の  
 りかきりなりく梅の意をつけり花三  
 の詩やみふがのめ  
 梅たえく日名一様いまくり  
 葉の窓乃虫葉ふつく

梅舎

三十三



巢の中ふ其の顔乃並びぬ

吾白松ハ先ふ解一たる海しめ之牙三ハヤハ  
ア松の樹ふよつけ志うも吾白のふふ阿  
らぬやうよつめたるもの之牙三ふがざら  
きなぐ附白ふ三句のわくめを牙一とさ  
金山灰やしらに松とハ思り水で  
雪ををもくなきおまぐらの松  
海士の子が鯨<sup>クジラ</sup>を告る貝吹く

ありとく松ハ吾白の樹常のふま阿ら  
ぬおまぐらしく住たしく阿らぬもたぐ  
人ならぬ雪中の寒おま像子うちぬ  
おまぐら松の松ふ雪のかるをたがむ  
るまぬもの者と見たり牙三ハそのふ  
をいたるしく松の松を浦をさしめ  
たあ海人の子らが見吹く鯨のまをを  
告るりそく附合の本旨みるりめ  
松の陰かこみ花めつらや  
おまぐらむる松は常木

附合

三十五

雪



加合

三十五

七夕の八日ハもの、はびりて

吾世向ハ何れのまゝなる新旅ハその始末  
三庭の算本を抄くや掃むくつと水を  
目もみおれ後然とこゝろてたる金ゲムの又去  
あり庭小小毎カキ握の葉たどりのちらぶり  
て七夕のなごりを見まゐる風情才三小  
く見えくも花の陰よりもつきき  
各人のよ降心をつくべし  
小傾城ゲイセキゆきくちぶらむまの暮  
陰ゆきくちかりのたきもの

吹まぐは穉のひごとけ何らみく

吾世向ハ其角なりか水ぐんとなり溜タビを  
不フ騎キや〜世路を為ウケむどつぬ小エ原  
たどつ小春ハル樓ロウの御ミ細ホ〜酒後平サ美ミる  
るのを好こるおけ向何りまゝにニか水  
が市橋の向ちかり旅ハ吾世向を一擲イツセキ千セン  
金キムのろ子コウシ〜見たり〜陰ゆふたきもの  
まゐる驕奢キヤウシヤを〜小牙三ハ何の引替ヒキカて既  
ゆふたきものまゐるハなる人あらばまゝ  
けをらき人乃マ〜まふとりた

加合

三十五



もらぬほどらふうぐしよその夜  
火をうつさるやそのうごひま  
一季の侍り八重にたさすわく

吾輩白八傳へのはま根ハそのゆふて火を  
うつさる小堂の乃成、唱の似海ひくくその  
ぞく法宗の藝をひひ才三ハ農家  
とわなしてその堂に成事おのほく空  
矢みをを三白までつげくこと  
厚ぐぬも志づらふきけがらびすや  
証志ひなうらふはごろの月

藤袴注はけし居しめでつらむ

吾輩句根ハ定なりとさつはく才三ハ酒も  
その産北家と見くもぬたうまハかくむり  
はけし居あるよ不自在あるものをとぐめ強  
美みみくつらりるよしたむ水とらん  
まふよりたりたり

あをねく粟の花さくは見え

いづきののそよふ啼ゆる蟬

夕始らふ結が糸面に月影

吾輩句根ふらささなち一才三ハ田家の夕



加巻  
北

三十七

録時あり

と流やを又習ひるよかつも子

市の子どものよきなる面布

日記もてふまをならざる涼し

設句おえな一旅もろのゆふに才三

旅ふりたりく夏の暑た申す涼なる

新しとあら

洗足不実と名につくきさらな

徐緩なるぶあむき乃里

みるゆわ階子の溢をていまで

きこえくるまうあらむ

萩株や水田のく一乃秋のそえ

きりくる日ふ代りゆるる

衣く一柿ハ馬乃きりり

粟白田野の秋色画くぶみ一紙ハ厚を

をのくつるのり才三こまふるるを

たりとりふだ一衣くつ柿ハと粟白紙

の優艶なるを何らみ下るのきりり

てと階替の詞たそえてくをのり

たるも海何よよく人のあぶふあらむや

舟舎  
上

三十一



年々を益ふ秋乃花かむ  
膝ふのこころ長世の本がら

宵の月よも海人み宿り

桑白に年々の佳<sup>カ</sup>魚<sup>イサ</sup>に曲<sup>マ</sup>水<sup>ミヅ</sup>の宴<sup>ユキ</sup>乃擧<sup>ウ</sup>び

さむしたむきたる之<sup>ノ</sup>根<sup>ネ</sup>ハ其<sup>シ</sup>夜<sup>ヤ</sup>ハ平<sup>ヘイ</sup>家<sup>カ</sup>々<sup>々</sup>

かくり出<sup>デ</sup>くるはまるり才<sup>サ</sup>三<sup>サン</sup>ハ將<sup>ショウ</sup>ドてまづら

たあ<sup>タ</sup>の<sup>ノ</sup>海<sup>ウミ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>何<sup>ナニ</sup>ぞ<sup>ゾ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>と<sup>ト</sup>り<sup>リ</sup>月<sup>ツキ</sup>み<sup>ミ</sup>對<sup>タイ</sup>て

此<sup>コ</sup>世<sup>セ</sup>がさ<sup>サ</sup>なり<sup>リ</sup>い<sup>イ</sup>わ<sup>ワ</sup>ふ<sup>フ</sup>其<sup>シ</sup>秋<sup>アキ</sup>ハ<sup>ハ</sup>流<sup>リウ</sup>の<sup>ノ</sup>え<sup>エ</sup>を

く<sup>ク</sup>を<sup>ヲ</sup>も<sup>ト</sup>めて<sup>テ</sup>奥<sup>ウチ</sup>小<sup>コ</sup>森<sup>シノ</sup>を<sup>ヲ</sup>た<sup>タ</sup>ぶ<sup>ブ</sup>ら<sup>ラ</sup>の<sup>ノ</sup>長<sup>チガハシ</sup>世<sup>セ</sup>ハ

き<sup>キ</sup>く<sup>ク</sup>も<sup>モ</sup>せ<sup>セ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>さ<sup>サ</sup>ま<sup>マ</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup>き<sup>キ</sup>く<sup>ク</sup> <sup>イ</sup>斬<sup>キ</sup>首<sup>ウチ</sup>く<sup>ク</sup> <sup>イ</sup>森

入<sup>イ</sup>くる<sup>ル</sup>志<sup>シ</sup>小<sup>コ</sup>もの<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>ぐ<sup>グ</sup>く

秋<sup>アキ</sup>友<sup>トモ</sup>ハ<sup>ハ</sup>わ<sup>ワ</sup>ざ<sup>ザ</sup>と<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>く<sup>ク</sup>め<sup>メ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>首<sup>ウチ</sup>金<sup>カネ</sup>さ<sup>サ</sup>

ま<sup>マ</sup>ぐ<sup>グ</sup>お<sup>オ</sup>取<sup>トル</sup>屋<sup>ヤ</sup>の<sup>ノ</sup>ア<sup>ア</sup>と<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>ぐ<sup>グ</sup>く<sup>ク</sup>

馬<sup>ウマ</sup>時<sup>トキ</sup>の<sup>ノ</sup>こ<sup>コ</sup>く<sup>ク</sup> <sup>ニ</sup>根<sup>ネ</sup>の<sup>ノ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>み

桑<sup>クサ</sup>白<sup>シロ</sup>根<sup>ネ</sup>ハ<sup>ハ</sup>先<sup>マ</sup>み<sup>ミ</sup>い<sup>イ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>つ<sup>ツ</sup>才<sup>サ</sup>三<sup>サン</sup>馬<sup>ウマ</sup>時<sup>トキ</sup>と<sup>ト</sup>り<sup>リ</sup>

依<sup>ヨ</sup>借<sup>キ</sup>ある<sup>ル</sup>べ<sup>ベ</sup>し<sup>シ</sup>白<sup>シロ</sup>ま<sup>マ</sup>る<sup>ル</sup>お<sup>オ</sup>あ<sup>ア</sup>し

雪<sup>ユキ</sup>の<sup>ノ</sup>根<sup>ネ</sup>を<sup>ヲ</sup>小<sup>コ</sup>と<sup>ト</sup>ち<sup>チ</sup>ま<sup>マ</sup>る<sup>ル</sup> <sup>イ</sup>根<sup>ネ</sup>ま<sup>マ</sup>ぎ<sup>ギ</sup>

日<sup>ヒ</sup>乃<sup>ノ</sup>出<sup>デ</sup>る<sup>ル</sup>お<sup>オ</sup>の<sup>ノ</sup>赤<sup>アカ</sup>さ<sup>サ</sup>冬<sup>フユ</sup>元<sup>ゲン</sup>

下<sup>シ</sup>者<sup>モノ</sup>を<sup>ヲ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>く<sup>ク</sup>船<sup>フネ</sup>渡<sup>ワタ</sup>は<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>ち<sup>チ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>く

桑<sup>クサ</sup>白<sup>シロ</sup>根<sup>ネ</sup>を<sup>ヲ</sup>小<sup>コ</sup>の<sup>ノ</sup>根<sup>ネ</sup>を<sup>ヲ</sup>く<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>い<sup>イ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>く<sup>ク</sup> <sup>イ</sup>根<sup>ネ</sup>ハ



そのりたきぬ 謹むるに何まりあまの  
はまぐらくよき句ハ解をむとほんがいつて  
第二義ハ落カ三ハゆりき名高き句之  
公おこの句をかねくさくらみねさくニ重  
まできまぐらゆるがつひみこの巻の才三才  
出されぬるとちりゆらさく句なるもくべ之  
西相ふ今ゆくや水汁の星れば  
笛の音水るにうつさ乃 橋  
いと音雨佳のまき森る松あり  
五五句然もに古調なるみ才三ハめでた

き正風舞あり 附えも又松あなめり  
松歌ふくくひ何げなるみそ水ハ  
待ねも一ろくはゆる草花  
ひくまらねぬづる 拾言ハ下子風冬  
五五句然ハきとえたるまの才三ハ舞  
なま句えいつてならむ解さん  
いほま立存る川はゆるる 嵐うふ  
あまのまきしたのそおふがら飛  
大歌れうだぬちにあくく  
五五句然冬のゆめりたの才三ハま

海音

十一



ふる凡のたぐ中におのちらりておろろ  
くたすきぐまへうぐま味くらむとまゝに  
こゝまへしまはらうく口をつぐむのこ

牛派き村のほとぎや五月毎

すまふき地 梅 燈の花

一枚のさほふにぞ森村何ゆ

舞向ハりづなるよをねたよとる

くもあふをえね新とらみてえね花の化

みかる向多し一旅ハ其ふよて村をえた

くき梅燈の本あゝとだり一才三一枚の

さほふ居るが小くめいし小屋森したる大木  
の伝添しうめだ

美土原れをあけ出く風の暑さ

野を松小蟬の鳴さるま

かちその持もがりの人と吐し

舞向照つけたる風をえけまはるの何つは

思ひやるべし旅ゆくたさりたす才三も

の何くりあくは置きたちの吐るまへ

うはりし縮の種をえの旭子

層もたふきぞ海池乃水



白壁の中より 礎うちろく

葉白にち代のゆくらあるをいりよめでたきり  
ざり之流ねもていたゞりたぢひのた  
れどそとあらふにねんきまよいつひたりか  
るめでたきち代ゆくらあるの園とて居も  
と奈はぎとつふらるゝ才ニハ引持どて  
白壁のちちよりお出る礎の新しな  
まじいおねをいつめよ何らひのり  
松尾小新酒をさすはねき  
月もかたむく石垣のちち

町の門返り 麻乃 飛とるく

三向とも向えぬらちり

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



第四句の歌

二十五条よ曰四句めハ洗更大りのゆふく  
軽きこいハ祭句詠才ニまでハ音おしる  
おとくるべーこやれ句さるやうにいひあつた  
まご一巻の赤な化け句ずりたどまるおしあ  
お一合とハ清したるるりそく

齒<sup>シ</sup>朶<sup>ダ</sup>の葉<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>持<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>乃<sup>チ</sup>去<sup>リ</sup>て<sup>モ</sup>負<sup>テ</sup>

ふの<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>由<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>何<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>春

未<sup>レ</sup>三<sup>ハ</sup>早<sup>ク</sup>春<sup>ニ</sup>ふ<sup>レ</sup>た<sup>ハ</sup>ど<sup>レ</sup>めて<sup>ハ</sup>持<sup>テ</sup>さ<sup>レ</sup>る<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>レ</sup>ば  
齒<sup>シ</sup>朶<sup>ダ</sup>の<sup>ハ</sup>葉<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>矢<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>ふ<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>て<sup>ハ</sup>ゆ<sup>レ</sup>く<sup>ハ</sup>そ<sup>レ</sup>ろ<sup>ハ</sup>ふ

らむろの持人の獲<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>何<sup>ハ</sup>ひ<sup>テ</sup>國<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>や  
たごよたごまろの時<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>門<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>お<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>ぬ<sup>レ</sup>る  
一<sup>ハ</sup>さ<sup>レ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>持<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>ハ侍<sup>ハ</sup>朶<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>わ<sup>レ</sup>ぎ  
こりあつたるや<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>め<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>づ<sup>ハ</sup>水<sup>ハ</sup>ふ<sup>レ</sup>り  
たごろのたご<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>あ<sup>レ</sup>ば

を<sup>シ</sup>つ<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>

田<sup>タ</sup>中<sup>チ</sup>曝<sup>ハク</sup>わ<sup>レ</sup>る<sup>ハ</sup>持<sup>テ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>重<sup>ハ</sup>乃<sup>チ</sup>何<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>よ

公<sup>コ</sup>家<sup>ケ</sup>子<sup>シ</sup>宿<sup>シ</sup>く<sup>ハ</sup>民<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>道<sup>ト</sup>

たもろき附合あり才三ハ持のま<sup>ハ</sup>わ<sup>レ</sup>ぎ  
の<sup>ハ</sup>ゆ<sup>レ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ご<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>叶<sup>ハ</sup>



の中乃宿ハ世小を小ものかた水家よて何  
グー君あどが妹のまきと見むとて思ひ  
てこさをたるを一板の宿きしころあり  
りし田螺りるゆふと来といつきがこきを妹  
といつる一字もく甚しういづるを

かへる鴨かへらぬ鴨もはハきく  
七シキ山ヤマを 出くる 月

たゞりしさをつけし七シキ山と山の名小  
まき後河山をさくしよむ  
水せきく屋森の石やなるはむ

妹シキのまき生うきあり

才三ハ左ふようく何のふて家の前に  
流る川あり其川中ハ石をたきく  
くまき屋森まきま之四向めハまき  
共河くりをつけるものありがくたつり  
つけるも一神と

月出よ川石をからむ 満もちて  
民の宿電のけふる 秋凡

才三ハ才よ糸さとまわて酒をどの  
何ふななるがと者の月乃たや出ば



酒竹管もちくく 保の罪屋をかりて月  
 を見むとならうちつねゆるき世句  
 めの罪屋を武備<sup>ゴボ</sup>生<sup>ナマ</sup>なるふりくかりも  
 月見酒もちたるどの 抱<sup>ダク</sup>息<sup>イ</sup>何<sup>ニ</sup>るべきふふ何  
 らざるを泰平<sup>タイヘイ</sup>の代<sup>タ</sup>代<sup>イ</sup>なるれどそ罪屋を  
 かりて酒もちるに<sup>ハ</sup>あるれつゝろよて民の  
 かまどはふざらひみりりといつゝの所をそと  
 たるありかつは<sup>ハ</sup>艾<sup>ア</sup>秋<sup>キ</sup>の豊<sup>トヨ</sup>秋<sup>キ</sup>たるをそ  
 へるべし 名人の手<sup>テ</sup>段<sup>ダン</sup>山<sup>ヤマ</sup>豆<sup>マメ</sup>一<sup>ヒト</sup>ふゆらむや  
 村<sup>ムラ</sup>るふ市の<sup>シ</sup>保<sup>ホ</sup>屋<sup>ヤ</sup>を吹<sup>フク</sup>りて

町の申ゆく川ねとの月

オ三のけしき村るふ建<sup>タテ</sup>方の吹<sup>フク</sup>そひて<sup>テ</sup>衣<sup>イ</sup>  
 のかり<sup>カ</sup>衣<sup>イ</sup>も吹<sup>フク</sup>とらるし<sup>シ</sup>きき<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>さ<sup>サ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>が<sup>ガ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>が<sup>ガ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>  
 句<sup>ク</sup>め<sup>メ</sup>の<sup>ノ</sup>庭<sup>テイ</sup>の<sup>ノ</sup>面<sup>メン</sup>へ<sup>ヘ</sup>ま<sup>マ</sup>ど<sup>ド</sup>か<sup>カ</sup>ら<sup>ラ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>ふ<sup>フ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>が<sup>ガ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>  
 け<sup>ケ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>げ<sup>ゲ</sup>を<sup>ヲ</sup>く<sup>ク</sup>ま<sup>マ</sup>め<sup>メ</sup>る<sup>ル</sup>月<sup>ツキ</sup>う<sup>ウ</sup>あ<sup>ア</sup>つ<sup>ツ</sup>あ<sup>ア</sup>つ<sup>ツ</sup>あ<sup>ア</sup>つ<sup>ツ</sup>  
 さ<sup>サ</sup>だ<sup>ダ</sup>う<sup>ウ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>の<sup>ノ</sup>方<sup>カタ</sup>風<sup>カゼ</sup>大<sup>オホ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>た<sup>タ</sup>ち<sup>チ</sup>あ<sup>ア</sup>ち<sup>チ</sup>り<sup>リ</sup>れ<sup>レ</sup>て<sup>テ</sup>月<sup>ツキ</sup>  
 の<sup>ノ</sup>て<sup>テ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>ま<sup>マ</sup>す<sup>ス</sup>し<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>ま<sup>マ</sup>が<sup>ガ</sup>て<sup>テ</sup>町<sup>チヨウ</sup>中<sup>チュウ</sup>の<sup>ノ</sup>川<sup>カハ</sup>ね<sup>ネ</sup>  
 つ<sup>ツ</sup>よ<sup>ヨ</sup>ま<sup>マ</sup>て<sup>テ</sup>る<sup>ル</sup>後<sup>ノチ</sup>の<sup>ノ</sup>り<sup>リ</sup>き<sup>キ</sup>い<sup>イ</sup>ち<sup>チ</sup>る<sup>ル</sup>  
 旅<sup>リョ</sup>人の<sup>ノ</sup>風<sup>カゼ</sup>か<sup>カ</sup>き<sup>キ</sup>ゆ<sup>ユ</sup> 春<sup>ハル</sup>を<sup>ヲ</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>  
 え<sup>エ</sup>た<sup>タ</sup>も<sup>モ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>ち<sup>チ</sup>刀<sup>タガ</sup>の<sup>ノ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>を<sup>ヲ</sup>い<sup>イ</sup>づ<sup>ズ</sup>



才三よき句とまゝこそふ依借のをうみ  
たのるぞく四句めいさの人がらをける不  
たりまきぞく附句にがふるふあうを  
くぞく風子と念をのつくもものくらバ  
いつも附合ハ初らぶく飛持るるべきを  
氣ふた刀とつけくる流瀧の影こそまを  
義あゝこそを志るべくは松に松のなほ  
おーくまー

掃ふとて消る雪をやがらむ  
石のくばこに墨<sup>スミ</sup>成摺<sup>ウ</sup>り

消くる雪をーかく掃ふとてがらむ男を  
風流のえを人に見て石のくばこふまを  
とて雪のながめは結二奇なぞかくさぬ  
しだけ

投りてき<sup>ス</sup>の編摺<sup>ウ</sup>まかこめて  
風呂林火ふゆく月の照ぶの  
まこくえんるあうちあじどよき句く

野を屋あぬの火渡もゆるまゆあふ  
山の阿あうく乃 待<sup>マ</sup>きまゆあり  
才三の春ろにけゆるふて四句めま乃



句ハナルきど花のづらなる。春もこの空を  
まをさく季の句乃後句ハかくあるべき  
了りあり

之般入ハたゞやぶつりて見さうけて  
るぐれとたがら 次第もつあり

人<sup>ニハ</sup>情<sup>ニシテ</sup>世<sup>ニ</sup>纏<sup>ル</sup>二句のつるふつくせり

夏冬ハえなく橋をうけゆる

門小顔出さ 月のたぎれ

第一三ハなるおふたハえなく橋とつり  
ハるるれどたどおしくにけハブ なる橋

を夏冬ハえなくと 花もろくつひるな

まごて四句めハるのこつりをとまて春

ハ花のため秋ハ月のたあまかけは橋よ

て夏冬ハえなくあらむとつけはるもの

あり一句のそらハ下をあたどの意

門小顔出さく物をこるはま

於凡におりふ合お成吹立て

返し手のこくちく なる生もの

はさるるこくちもなるらむ

家が著<sup>ヤ</sup>信<sup>シム</sup>を春のよまきんえ付



上のちりりに 一ほぐる 糸の盡

これハ炭徳の一辨ちりり 一家ある徳を春  
のちりりまよとちりり付くる人ハ糸商人の仕  
合よりくく 買とむる糸も此糸ハ盡す  
まよるはまよ

竹第五句の歌

雨佳見る 窓の 月かきりなり

風吹ぬ 秋の日 瓶カマ子酒なき日

古洞ハとくく からのけよをりなり  
お向ハ侍人などの窓お小獨ドウ望ザし月下  
の雨佳をちりりめあるはまよ五句めハ秋の  
日乃ちびりきたに風も吹ぬ瓶カマ子酒け一なき  
寂セキ莫バクのりた之瓶カマ子酒なきぬど侍よ  
くつりなり

旅々互に窓をやつき終る



三子 記 子 帳 笑ハむ月々海

四句めハ朝敵テウテウのためよたくりはほくひろふ  
空を流しまぬらむ付控えめけをく  
ふんがくしなる軍虫のたもくげ之五句  
め後よてまろ笑べきに取ふ控笑ふ於合  
たのよにあふ人あらぬ人ともくしり  
七 晴山を出りくは月  
町づらり粟のこげる 砂をけ  
きこえがくしり  
碎くき人の宿ふりり

けの賀此いで面白や記ふが舞  
お白酒くくめがかりてけのこを  
賀のさだと思へる附合あり 老シラ来ライ子シが  
たのよをふくめるくろも何らむ  
いつら鳥エ帽カ子のぬげる春凡  
旅るやら馬乃何ようぬ何らむ  
四句めハ身そ人の控何らびあるをを  
白の白馬ハクバ驕オウくはびる子コのまを  
をつけり  
水日ミツヒ平ヘイたはまるるるのま



御合

三十九

入月の為に他様とる衣老のり

赤白習ふ事あるたきあるとつ小の清替の詞  
おてゑる系を習ふとてひそくよ何ゆゆ  
くお習ハ事ぬれくるはよくお白ぬれ  
を落衣老と見く何やきまぐこの者れ  
るふ奴ゆが入月のゆがらたふはごま  
えぬど何ゆれぬゆりくよくくもれが  
しからぬ衣老一騎<sup>イッキ</sup>為げきし  
何より人たむとの附合なり  
川<sup>カハ</sup>の<sup>ノ</sup>親<sup>ミ</sup>おさ、月乃たるん

雲行も秋の日しをればむざ降

赤白に月のころよく晴くるる  
秋の白しをればたちあかりあてかき  
まほどなくむざと降出くる存外の  
天衣なりまふぬくべき附合の  
なま

嵐ふたむ無乃細く

桂本屋ハ桂本ふ刺をかきむ

赤の白を桂本屋の庭に見くる附合  
狸<sup>タヌキ</sup>たむざは降<sup>ニ</sup>張<sup>リ</sup>の弓

御合

三十九



まいら戸小暮る遠りる暮乃月

四句めさへめくはびりきふと見くまいら戸

小暮るのりひかりく人も住ぎあひくる

吉屋な乃はまおきごきごきおま

一灰うちたてくうめ一枚

まのぬいねもみらぎふ自由はよ

れのをき伴持たをどふ下る時いつきけ俯句

を思ひ出しく澄もこがろくたり吉人乃

まとりくたなるぬり句さるきさるま

なれど道中のまがごと目茶

ちあらるくうれし十の子を

ふ代種へきものをはまぐ子のゆ

お旬十の盃あらべたるハ女の酒もあは

何らで子のゆれ子をあらむと思ひあが

つたて人の子のゆよ何らとやごの

絆ゆつたり一句もさるれきんぬる句ふ

ていつめでたき句あや

は際けまじるは本をいつく

鶴が一のふるとやがてくれの月

四句めハは際まじりのは本をいつく



家ぬふゆるをどれのみぐいむ句めハ何  
つりもちやくたどむられと見くるのまほ  
向るめかくまらしくとまゝえおましくたど  
ここのやうに<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>もち<sup>い</sup>う<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>何<sup>い</sup>の<sup>い</sup>句<sup>い</sup>を  
正凡のた<sup>い</sup>申<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>何<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>う<sup>い</sup>と<sup>い</sup>か<sup>い</sup>う<sup>い</sup>ハ<sup>い</sup>  
な<sup>い</sup>み<sup>い</sup>そ

お市<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>人のた<sup>い</sup>う<sup>い</sup>る<sup>い</sup>夕<sup>い</sup>月<sup>い</sup>

本<sup>い</sup>刀<sup>い</sup>の<sup>い</sup>音<sup>い</sup>き<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>え<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>居<sup>い</sup>合<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>き

伏<sup>い</sup>見<sup>い</sup>大<sup>い</sup>律<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>小<sup>い</sup>都<sup>い</sup>會<sup>い</sup>の<sup>い</sup>何<sup>い</sup>り<sup>い</sup>き<sup>い</sup>は  
解<sup>い</sup>を<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>

上のた<sup>い</sup>より<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>何<sup>い</sup>ぐ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>采<sup>い</sup>の<sup>い</sup>在<sup>い</sup>  
音<sup>い</sup>の中<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>く<sup>い</sup>と<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>月<sup>い</sup>の<sup>い</sup>や<sup>い</sup>

第四句の<sup>い</sup>歌<sup>い</sup>に<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>め<sup>い</sup>く<sup>い</sup>五<sup>い</sup>句<sup>い</sup>め<sup>い</sup>も<sup>い</sup>や<sup>い</sup>り<sup>い</sup>采<sup>い</sup>  
高<sup>い</sup>人の<sup>い</sup>日<sup>い</sup>和<sup>い</sup>の<sup>い</sup>晴<sup>い</sup>そ<sup>い</sup>小<sup>い</sup>價<sup>い</sup>の<sup>い</sup>高<sup>い</sup>下<sup>い</sup>を<sup>い</sup>考<sup>い</sup>  
る<sup>い</sup>は<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>く<sup>い</sup>世<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>お<sup>い</sup>か<sup>い</sup>め<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>もの<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>は  
ま<sup>い</sup>ど<sup>い</sup>ろ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>ろ<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>く<sup>い</sup>の<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>句<sup>い</sup>  
の<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>ハ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>

ろ<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ど<sup>い</sup>げ<sup>い</sup>バ<sup>い</sup>酒<sup>い</sup>の<sup>い</sup>中<sup>い</sup>

中<sup>い</sup>藤<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>強<sup>い</sup>も<sup>い</sup>森<sup>い</sup>て<sup>い</sup>居<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>音<sup>い</sup>の<sup>い</sup>月<sup>い</sup>

お<sup>い</sup>句<sup>い</sup>一<sup>い</sup>百<sup>い</sup>の<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>め<sup>い</sup>く<sup>い</sup>と<sup>い</sup>え<sup>い</sup>る<sup>い</sup>一<sup>い</sup>十<sup>い</sup>の<sup>い</sup>



はるるをけりていづつこのどけい海を望  
たる中とありてさむめもその物をあつた  
る奥の産をぬふめい乃森不取つるあ  
らう人のり森てある者もなれ月をむ  
うひく酒のこぬることけりて

このたのしみはなほいづれか  
はるるをけりていづつこのどけい海を望  
たる中とありてさむめもその物をあつた  
る奥の産をぬふめい乃森不取つるあ  
らう人のり森てある者もなれ月をむ  
うひく酒のこぬることけりて

混雑の記

段巴後ふみりし船のしづみ  
糸よえりてをあらふ紙衣

あよもいゝるめくみおし栗の依借ハ解  
かてさあがりあふ座越の志と見く船  
送り鳥帽子をぬぎく紙えを足る官  
を辞したる人くくする附のあらむ  
あハ返さるが肝意を大集子

雷鳥の幼きるは痛たなるあらむ  
あふ韓退之が潮州みりりる時のふ



ちくらむら 後句ハ返さそりあけり 返さるる益  
勲跡を送るの序みするこりあけりをた  
てたるよふりくするの字一字の附とゆ

破 蕉 撰 つく 活のこを吹

朝鮮ハ西伝を 撰る 途ちあり

附さるるをちらむ 辞をぞ 後句ハ大國の

あつりちらむら

櫓 入きぬ 氣ハ十の 荊 あり

此 所ハ 胡 産く 世を 夷 あり

お向の 櫓入きぬ人を 男と見よとまゐ水

いひらぬ 後句をこそ 男とちらむてつけれ

お向よてハ 女をこそ ぬらさうけらるハ 此

不ふすぬりても 櫓けららば 何まきく 胡之生

かきぬる 祈し ぬ夷をく ちらむら

山 聖ハ 祈し 辭をむさがる

盗之 井の 月ハ 伯夷が 口之 洗ふ

お向 岸の 縁 悲ハ 何らで 月夜の人と見て

伯夷が 首 隙山に 巖をく ひとつに 死に

るちりやを 思ひ 君子ハ 渴して 益泉の水

飲飲ぎしり 法を 行く 飲こそ ちらむら



ハキ伯夷のめきけ<sup>ハク</sup>潔の人も足ハはふなら  
むと階<sup>ハク</sup>階<sup>ハク</sup>の何之<sup>ハク</sup>益<sup>ハク</sup>泉を益井とかへる  
を依<sup>ハク</sup>階<sup>ハク</sup>あらむ

嬰<sup>ハク</sup>の森<sup>ハク</sup>を母<sup>ハク</sup>はさまされ

つひ<sup>ハク</sup>五<sup>ハク</sup>人<sup>ハク</sup>を母<sup>ハク</sup>はさまされ

お白<sup>ハク</sup>ふくつみくもも出<sup>ハク</sup>ざり  
嬰<sup>ハク</sup>の森<sup>ハク</sup>を母<sup>ハク</sup>はさまされ  
のきこもめくる<sup>ハク</sup>辨<sup>ハク</sup>之後<sup>ハク</sup>白<sup>ハク</sup>さぐふ<sup>ハク</sup>甘<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>取<sup>ハク</sup>  
つけてともも<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>人<sup>ハク</sup>に志<sup>ハク</sup>こ<sup>ハク</sup>ぐ<sup>ハク</sup>れ<sup>ハク</sup>ぬ<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>  
ハバせうも<sup>ハク</sup>ち<sup>ハク</sup>ま<sup>ハク</sup>り<sup>ハク</sup>り<sup>ハク</sup>て<sup>ハク</sup>ち<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>う<sup>ハク</sup>ら<sup>ハク</sup>む<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>

ふあ<sup>ハク</sup>て<sup>ハク</sup>世<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>思<sup>ハク</sup>ひ<sup>ハク</sup>た<sup>ハク</sup>ら<sup>ハク</sup>む<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>は<sup>ハク</sup>さま<sup>ハク</sup>され  
ひ<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ  
け<sup>ハク</sup>め<sup>ハク</sup>あ<sup>ハク</sup>ま<sup>ハク</sup>さ<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ  
ハ<sup>ハク</sup>ま<sup>ハク</sup>さ<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ

擗<sup>ハク</sup>体<sup>ハク</sup>か<sup>ハク</sup>ぶ<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ

寸<sup>ハク</sup>法<sup>ハク</sup>海<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ

二<sup>ハク</sup>句<sup>ハク</sup>階<sup>ハク</sup>階<sup>ハク</sup>あり<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ

月<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>神<sup>ハク</sup>か<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ

鳴<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>羽<sup>ハク</sup>ま<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ

鳴<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>羽<sup>ハク</sup>ま<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ

鳴<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>羽<sup>ハク</sup>ま<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>母<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>こ



死—らぬ僧をいぢり草落

月の白さ心めく 蕭條たる不と見く 町の羽  
さるふおあけくるり ぎをつけ 後句捨てて 借  
とらぬれ 飛ぐら 後の世乃とて せりをもたぬ  
ぬ 更法海をさる 落のりらよとらぬ 清経  
あふいと 落のりらぬ なるものく せりとて なる  
ものふらぬ せりらぬ なるものく せりとて なる

時 海山崎 今半 とき舞

い 世世のどてらををさる 小深なる

けとる せりもあや

時 海山のせき子いぬ 愛ををさる

一 の娘里の 産屋小さる いま  
お向の 愛に せりや 出ぬよらむ なるもの  
とて 時海のかと 乃をををさる なるもの  
へる片よ 後句に 甘持ぬふらぬ 一の娘まらぬ  
とる 愛いひを づけるもの ありけり なるもの  
をに せりらぬ なるもの ありむ

舞 名よたつとらぬ 額を 責ル

時 なる 怒の 君と 啼く 一り

お向 ねあきの 額を 責る なるもの

時 なる

百廿六



後句ハまゝハちねあひのこたる泡子め  
 浮世ハ泥む空を 怒の 瀬  
 沓ハ花を負重し 笠ハちむ儀  
 附合ハいづちあらむ句ハ笠ハまゝ 品天の  
 雪といふ詩法をくく 依階ナリたるこ  
 老蕉あるドの 懐たしくこよ  
 齋ハさるさといふたもくらハびや  
 前句其角が 筆をゆて公おみまきといひみさる  
 たり 情句公おのりぐゆをこつてたり 妙は廿  
 角をこつたるこ

聾入の 近づきまゝ 小ぬきぬこ  
 きくく やむぐ 昔くらく  
 お白きぬこに 聾入の 衣をうちちのり 用  
 意をまゝに ま後句ハ 礎を 塞下の 曲りて  
 つけゝる 古詞の 趣と  
 吹小 黄金ハ 小紫衣を 濁る  
 黒 細くろく ねくめが 乳  
 昔方ガ 本ぢんけ 二句を あらべたる びんうま  
 流うつし 何やすり ちあらむ ちがつる ちり ちの  
 白ハ 靴をこし ちるる 白の 車輪 といふる 発

好句  
 其

百一  
 二



句の巻乃中の句よて出るはちけそのたぐ  
やむぐ暮うらみありといつ。句の後句あり  
後の里細の句ハ詩商人事を合算るは僕  
くみといつ。葉句の形は句のまゝにち干  
紙き賣小糸をゆるさうらむといつ。句の後  
句よてをいり回ト巻よも何らぞはれは  
里細の句ハ亦四句の形小入るをきをいつた  
トくは二句をバあらべらむといつ。まひがこ  
とらふをー  
栞カシ原モ友ガミ采サ標ミの角を巻おむ

寶ホウ津ツを使とさ荒海ウラウミの味  
お句ハ琉球リウキウ國クニあごの備イをは東ヒガシのままま  
後句もその何れり小魔法コマジをお子コ者ノの何  
らむとの附句ツケ  
洪コウのらええ 猛マウきき世セ小コ出デよ  
虎コ懐フタゴ小コ娘メるる 何ナニりり つつき  
お句は猛マウきき世セ小コ洪コウのらもも川カハつつだだきき英エイ旗チ  
出デすす之ノ後ノチ句コト虎コを懐すす 不フささくくを見て  
吐ハきき乃ノめてて洪コウのらええを生むむととかかららの  
おお後ノチああごご小コねねりり何ナニももくくげげあり

附句

四十八



山寒く四<sup>シ</sup>膳<sup>シ</sup>の床をふく見  
づと火ききえく 指乃も一び

いづちあらむ解きよるり何とハぞ  
西<sup>シ</sup>所<sup>所</sup>を 後<sup>アヤ</sup>ふつてお何やたく  
哀<sup>アハ</sup>いふ空<sup>ミヤ</sup>城<sup>キ</sup>のわく吹<sup>フク</sup>洞<sup>ツ</sup>らむ

お向ハ抱<sup>ア</sup>女<sup>メ</sup>をののまぐく後<sup>アハ</sup>向<sup>ム</sup>のわくハ萩の  
ひまこもバあり世<sup>ヨ</sup>小<sup>コ</sup>林<sup>リ</sup>の花<sup>ハ</sup>とつ餅<sup>ヒ</sup>をぶく  
解<sup>ト</sup>お熟<sup>シ</sup>ともおちるよてハつみく

みちのく乃<sup>ノ</sup>夷<sup>ヒ</sup>まらぬ石<sup>イ</sup>臼<sup>ウス</sup>  
武<sup>ム</sup>士の<sup>シ</sup>體<sup>テイ</sup>は丸<sup>マル</sup>森<sup>シ</sup>戸<sup>ド</sup>くららん

前<sup>マ</sup>向<sup>ム</sup>みちのく夷<sup>ヒ</sup>の石<sup>イ</sup>臼<sup>ウス</sup>をさへ見<sup>ミ</sup>ーらぬ子  
後<sup>アハ</sup>向<sup>ム</sup>ハ夷<sup>ヒ</sup>の身<sup>ミ</sup>はあゝさな葛<sup>カ</sup>城<sup>シ</sup>の大<sup>ダイ</sup>君<sup>キミ</sup>は  
いりぬひ一<sup>ヒト</sup>休<sup>ユ</sup>ぬらむ

庭<sup>ニ</sup>のがり火<sup>ヒ</sup>たてるたそも  
宋<sup>ソウ</sup>女<sup>メ</sup>五<sup>イ</sup>玉<sup>タマ</sup>のち練<sup>レン</sup>のうちあき

庭<sup>ニ</sup>のがり火<sup>ヒ</sup>乃<sup>ノ</sup>孰<sup>シ</sup>ふさくらふみゆるハ後<sup>アハ</sup>を  
らむといふを哀<sup>アハ</sup>向<sup>ム</sup>くくがり火<sup>ヒ</sup>を漢<sup>カン</sup>士のた  
火<sup>ヒ</sup>と玉<sup>タマ</sup>のち練<sup>レン</sup>ハ宋<sup>ソウ</sup>女<sup>メ</sup>のちたハみ玉<sup>タマ</sup>  
凡<sup>ソドモ</sup>情<sup>ナリ</sup>はあたる附<sup>ツ</sup>向<sup>ム</sup>之<sup>シ</sup>

ねろさぬ定<sup>サ</sup>に枝<sup>エ</sup>のぞく松



傘の陰にかくくらくらかこぶけく

お白定の戸おろさぬとつよを傘をちりぐ  
仕よりしてあるふと見ゆる懐白く

衣をたつ鎌倉山の翼ほし

志ぼるたもと成白ふ凡葉

お白の正きどと仲仏ちうひく鎌倉山の  
おくふいこもまたる人ともきこえ又ハかま  
ら山の仲仏にちうひをきてたるとも思  
いづれおれぐやうあらむ短白いづれも思  
ひ入りて志ぼるをもとふ又凡葉の白ひ

白ひまわりくわゆるく心を動けんまぐと

お小せつなる衣の懐るり

聲シヤイつツ方ハ鳥トゆる道

楯タテの葉よふフ葉ハ成ニたリ終ルり

お白聲つつかふ鳥のゆる清果の地い  
ふも匠士ぬぢけ人の住んき何ぐりて空め  
世も人も見もんりんさかふ葉成を展  
るはまの附く楯の葉ふかくはあふぬぢけ  
ざあんがあらぬあふあふたをモ楯ヤ  
よておの葉よとつよも同ドるありはまぐ



猶の美よ小舟かへりての何きバ 怨なきも  
あらん

凡の音ならぶ 菴<sup>ウツ</sup> 乃いりく

大 口 雪 掃<sup>ユキハ</sup> 庭の 雪 掃

茶向菴<sup>ウツ</sup> 洗の大なるがいつも ぬらびて 凡  
の音はいつのきままでの庭ハ平人の家  
ホハ何らむときいて 庭の雪掃ハ大に 忌と  
そる 大茶の何れきほをつけるもの

み<sup>ミ</sup> 花の 縁<sup>ヘリ</sup> ねおさあ

襪<sup>ハキ</sup> 花の 縁<sup>ヘリ</sup> ねおさあ

いっある 附<sup>ツケ</sup> 言<sup>コト</sup> 取<sup>リ</sup> らむきと けり がく 吉 洞<sup>ヨシ</sup> へ  
ほむぬかふる 句<sup>コト</sup> なを

世の中を画<sup>エ</sup> 小の ぐいする 茶の 煙  
妹<sup>イモ</sup> がりーら乃<sup>ナ</sup> からぬ や片<sup>カタ</sup> した

茶向ハ画師<sup>ガク</sup> 小何<sup>コナニ</sup> らで 画<sup>エ</sup> を ぬき せり 母<sup>ハハ</sup> が  
いらでかこ 一<sup>ヒト</sup> 茶<sup>チヤ</sup> 取<sup>リ</sup> 棄<sup>ス</sup> つて 画<sup>エ</sup> よ 子<sup>コ</sup> けり ぬる 煙  
居<sup>イ</sup> などの 片<sup>カタ</sup> まく 後<sup>ノチ</sup> 向<sup>ムカ</sup> ハ 画<sup>エ</sup> よ かけ る 女<sup>メ</sup> の 髪<sup>カミ</sup>  
けがらり 小<sup>コ</sup> ゆら ぬる 一<sup>ヒト</sup> 附<sup>ツケ</sup> 句<sup>コト</sup> な

美<sup>ミ</sup> 哉<sup>カ</sup> 何<sup>ナニ</sup> ぞ 金<sup>カネ</sup> の 乾<sup>カ</sup> 風<sup>カゼ</sup>

津<sup>ツ</sup> の 園<sup>ヰ</sup> ね ちよ へ かく おくめ

附<sup>ツケ</sup> 言<sup>コト</sup> 止

五十一



前句ハ恋人の何れの子守りくおやを金  
ゆひより舞いておし居れば羨のそれおまハ  
しくく<sup>キキ</sup>お出いらあらむくはきくはまるり  
ほ白ハまららよのき句よてたどおのりきを  
つけおはりしりのおまのたふきくおいひ  
たよのそなきどおまの次よつのかよれお  
波とやちしくひくくはらいたるお趣何  
ふよく筆おまつくはむや  
餅二かきぬえりそよ常  
若るよのちよ子子の目れおひらむ

糸白ハお枕のおみ餅を用ゆるよ源氏  
お酒をどまも何<sup>オモカケ</sup>の餅もく何ましかすれえ  
うしきりくるいひあまべー後句ハ若る  
の抱女乃いりひるのよとめあした  
いが庵ハ遊ふよ宿りた何くめよて  
髪をたやさまをぬふ身おぬど  
冬の日れ依階ハ家へのはまきくくわ  
しんぞけつけ句を何よ人の説ふ遊ふ宿り  
庵の人れ髪ハやましく見よハりりーか  
を庵ふかくまふまきくくありといへるへ



キとえぬ卒に母ふまどくと泣  
泣の曉きく火を焚く

お白中し小卒に母のみ字乃きえゆきな  
ハモの思ひもなほくらあふ侍ハ目の赤は  
御くくかあり内たと一あうるべ一後白  
墓守の火を焚ぬるはまきえぬといふ  
親法のみきぬとまねがく

二の尼子近衛の花乃内りきく  
餘ハむぐらよとばけりぬむ

お白二の尼とつふわりり一以ハ怒ハ法

からけり一人の君もうれさおひてみつ  
らも尼となり君乃おボ言ハ控トふらひな  
は人ろの尼はものぐりきく一人ハ君ハ亮  
兼オ一り或ハむりハまづり一も一人の今ハ  
里ふ下ゆ多之後向もまどらろの人よふ  
身ハ様ハの祥よまあるとかち位ハ人  
今不始の火を放つ卒

盗人の記念の松乃吹を以て  
お白ハ四ひまきけ一松乃火をばあつ小  
たどその糸ををつけくるあつ



何れもこの遊もとけし時名

秋水一斗もてつとき扱ふ

お向におまがら送くをいづく抱るを去  
き扱といはむとて秋水一斗とつらうをいづく  
水時計のりあるよー冬の日北依階ハ  
まじく古酒の体真何とてかむつりけ  
りくるたかー

中よ木槿をたさむ民登折

牛の政とあらふまのゆふらふ

お向はは人儒者なまのからめきたる葉

なめ物お人の何げつらみけとが位軒い

とよー

床みけく語水ばいとある男

得はまたげのねと赤まー

お向きとえたるまのあれぞをうたむく

後向はけいこのためおむりー得はまたげ

らねるころあど思ひおくおめさな

け二向たれもく傾城賣女のふい

めれどろおころあころ何とてあはれ

ふた〜はま〜い〜い〜



明日ハ 敵 首 ねらめさあ

小 三方子 重とらせむとつこひ

茶臼にまこととに 戦場の白をねど 後白を  
陣中のつひとつこひ 何とやら きてたて 公ねり  
附白に茶臼のつひをかへく 志うもよく 附く  
松多しけ 白のころろにたど 恒まりの 席と  
碎更のたふふ 敵よ 首ねらめ 志うもよく  
ねど 志うもよく 志うもよく 志うもよく  
化名をたれが 軍出ふ 何とやら べき 名をたれが  
ねらめ 志うもよく 志うもよく 志うもよく

管 怒り 糸の 燭も 一と

さしハハがぶるい くらのもさぶか かのさきといふ  
みねのおとつけ 水に 花の 宝に 子なま  
るころ ねらん 後白に 松どくかの 松のお  
た一まはうち 何とやら 志うもよく 志うもよく  
物へるやれ 志うもよく 志うもよく 志うもよく  
三味線からむ 子 破の 糸人  
道まがらみ 波で おりる 其久を 志うもよく

月ふたくる 庵 痛の 髪は 赤枯て

上

下



恋をぬ 破 隙 隙をまつ

と小八師軍更が解いこす

いぬのまつこよき 平 ぼつちり

袂より 硯をひらき 山陰子

山のたきまのひ 破つつ 比のりきあま

見まぐーがくき 流 縹 なるるらるの石

千 縷うちかけ 流 硯より ちりあいて ける 小 景

あふよむまぐー

灯の光あふらふ 小 情 くらぶる

まぬ 教のままのふ力を 推 げ ぬ ぼ

灯籠をまつとつとつと 小 景 流 と 教 と 對 一 たる

何れなるお 撲 ち り り

まがき 近 津 江 の 水 子 ぬ 水 行

佛 喰 たる 魚 ぬ ぞ 記 け 玉

つるまの河さよ 河 づ たる 大 魚 の 佛 を ぐ

ひ ち り へ 何 く ま ぐ 勢 き 延 向 り 何

くの あり 何 くの 佛 此 何 ぞ なる なる

たる なる 古 抄 づ け の 件 を 何 り 也

る 破 ち り ぬ きの 由 田 ち り 反

水 げ ぬ 勢 ち り ち り へ

七 六



春の目新

雪の粧<sup>ユキ</sup>乃<sup>ノ</sup>園のらまめづらした  
襟<sup>エリ</sup>子<sup>コ</sup>首<sup>タカ</sup>旗<sup>ノ</sup>片<sup>カ</sup>彼<sup>カ</sup>を<sup>と</sup>とく

お向<sup>ムカ</sup>の雪のたむきぶ<sup>ユキ</sup>国<sup>クニ</sup>のまき<sup>マキ</sup>なる風  
騒<sup>ウラハ</sup>の人<sup>ヒト</sup>報<sup>ウラハ</sup>係<sup>ケ</sup>乃<sup>ノ</sup>り<sup>り</sup>へく<sup>へ</sup>似<sup>ニ</sup>株<sup>サ</sup>置<sup>シ</sup>のた<sup>タ</sup>む<sup>む</sup>は  
み<sup>み</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>化<sup>カ</sup>あり

けーの一<sup>ヒト</sup>ま<sup>マ</sup>ふ<sup>フ</sup>名<sup>ナ</sup>を<sup>な</sup>ご<sup>ご</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>得<sup>ト</sup>  
三<sup>ミ</sup>日<sup>ニチ</sup>月<sup>ツキ</sup>乃<sup>ノ</sup>来<sup>キ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup> 待<sup>マ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>年<sup>ネン</sup>

糸<sup>イト</sup>念<sup>ネン</sup>ハ<sup>ハ</sup>き<sup>キ</sup>げ<sup>ゲ</sup>の<sup>ノ</sup>さ<sup>サ</sup>ら<sup>ラ</sup>来<sup>キ</sup>た<sup>タ</sup>ち<sup>チ</sup>り<sup>リ</sup>や<sup>ヤ</sup>く<sup>ク</sup>を<sup>を</sup>見<sup>ミ</sup>て  
大<sup>ダイ</sup>情<sup>セイ</sup>一<sup>ヒト</sup>た<sup>タ</sup>る<sup>ル</sup>ま<sup>マ</sup>ぐ<sup>グ</sup>と<sup>ト</sup>悔<sup>クワイ</sup>向<sup>ムカ</sup>ハ<sup>ハ</sup>三<sup>ミ</sup>日<sup>ニチ</sup>月<sup>ツキ</sup>の<sup>ノ</sup>お<sup>オ</sup>も<sup>モ</sup>る<sup>ル</sup>

ハ<sup>ハ</sup>ら<sup>ラ</sup>く<sup>ク</sup>て<sup>テ</sup>待<sup>マ</sup>の<sup>ノ</sup>ご<sup>ゴ</sup>む<sup>ム</sup>と<sup>ト</sup>呼<sup>ヨ</sup>ぶ<sup>ブ</sup>ふ<sup>フ</sup>よ<sup>ヨ</sup>く<sup>ク</sup> 福<sup>フク</sup>を<sup>を</sup>得<sup>ト</sup>  
固<sup>ツ</sup>を<sup>を</sup>得<sup>ト</sup>る<sup>ル</sup>こ

ま<sup>マ</sup>ぐ<sup>グ</sup>ハ<sup>ハ</sup>飛<sup>トビ</sup>竟<sup>ニ</sup>花<sup>ハナ</sup>の<sup>ノ</sup>か<sup>カ</sup>げ<sup>ゲ</sup>よ<sup>ヨ</sup>入<sup>イ</sup>  
ろ<sup>ロ</sup>の<sup>ノ</sup>望<sup>ノゾミ</sup>れ<sup>レ</sup>日<sup>ヒ</sup>を<sup>を</sup>ふ<sup>フ</sup>も<sup>モ</sup>れ<sup>レ</sup>あ<sup>ア</sup>ど<sup>ド</sup>く

花<sup>ハナ</sup>に<sup>ニ</sup>と<sup>ト</sup>ぐ<sup>グ</sup>い<sup>イ</sup>く<sup>ク</sup> 竟<sup>ニ</sup>花<sup>ハナ</sup>よ<sup>ヨ</sup>入<sup>イ</sup>を<sup>を</sup>西<sup>セ</sup>行<sup>コウ</sup>く<sup>ク</sup> ね<sup>ネ</sup>が  
い<sup>イ</sup>く<sup>ク</sup>ハ<sup>ハ</sup>花<sup>ハナ</sup>の<sup>ノ</sup>か<sup>カ</sup>げ<sup>ゲ</sup>よ<sup>ヨ</sup>て<sup>テ</sup>ふ<sup>フ</sup>あ<sup>ア</sup>死<sup>シ</sup>む<sup>ム</sup>そ<sup>ソ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>け<sup>ケ</sup>ら<sup>ラ</sup>ま<sup>マ</sup>ぎ<sup>ギ</sup>乃<sup>ノ</sup>  
空<sup>ソラ</sup>月<sup>ツキ</sup>の<sup>ノ</sup>光<sup>ヒカリ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>奇<sup>キ</sup>を<sup>を</sup>思<sup>オモ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>お<sup>オ</sup>く<sup>ク</sup> 西<sup>セ</sup>行<sup>コウ</sup>ま<sup>マ</sup>そ<sup>ソ</sup>の  
空<sup>ソラ</sup>の<sup>ノ</sup>ふ<sup>フ</sup>あ<sup>ア</sup>死<sup>シ</sup>む<sup>ム</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>り<sup>リ</sup>し<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>が<sup>ガ</sup>た<sup>タ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>も<sup>モ</sup>れ<sup>レ</sup>あ<sup>ア</sup>ど<sup>ド</sup>く  
ろ<sup>ロ</sup>の<sup>ノ</sup>に<sup>ニ</sup>死<sup>シ</sup>た<sup>タ</sup>一<sup>ヒト</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>へ<sup>ヘ</sup>る<sup>ル</sup>係<sup>ケ</sup>の<sup>ノ</sup>何<sup>ナニ</sup>も<sup>モ</sup>そ<sup>ソ</sup>西<sup>セ</sup>行<sup>コウ</sup>を<sup>を</sup>  
う<sup>ウ</sup>ら<sup>ラ</sup>や<sup>ヤ</sup>した<sup>タ</sup>る<sup>ル</sup>公<sup>キョウ</sup>お<sup>オ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>り<sup>リ</sup>こ<sup>コ</sup>あり



控らぬくく物るり然等の放まきる  
火にうぬ火燵なた人を見む

赤白に然等鳥ふたどくく人の或くくらぬる  
をいひたる之火にうぬ火燵にうぬも  
しきものつくちき人の侍もろつた何ら  
つるべたけしきあらむふ赤白の或く  
たるを或るりぬる人にしきつた白く  
冬まつ納豆たつくあまべー  
花小位様の御ときてみる  
赤白に秋季なる花をうりけりてつけ

たるものちり白くはくならむ解がく

西南小桂の花乃つ不む時

茶の何がら小茶まろつたる

米白桂の花とらあつて月をきこたよ一白  
の根幹からのきたるが茶の何がらの新  
ものをつけく何つらひたる茶油茶膏  
とてけさくあせとぞ

飯よ白系茶よのる

寅の日乃且を飯治のつく死  
赤白に茶よのまいつちるや又いたまけ



たよみや後白ハ飛流ガ怒海くもつての  
いのりよ宣のよく起くよ草のよをそ

はれまあり  
深カユさくる 曉アサキ花ふかこまを

結ヒ衣の下子 懐ヒふ春風

茶臼をりのまをぐく見くめく曉の  
深ふむらひぬるはまが軍の出立よはら  
ぬどねぐやちあらぬ世をいづかめよもおの  
是をたるうぐだほ名の下のまこちよらひ  
たるまがく

砂サとはまき 葉切りゆ

秋の沈流乃ち連歌いとかりよ  
砂とよま重のよ葉そりよ出のうらよまらき歌  
の席なるべららどお向のやまらゆのねど  
ろくらのよけまよも何らぎらば流のよま歌いと  
かりよよまらりたるよ古人の心を用ゆる室  
なよらな

夏ナツ涼き 山ヤマ橋ハシふけくら見む

麻アサかまきつよあのを葉阿む

お向うち何がりたるふとりて舟の葉採也



は家とつけらるるあり麻りりハ係の化名な  
 きど芦荻とも菰荻ともいふべきを麻りり  
 復をもとたふすむりーかゝる集も何んべき  
 やゝの名をつらりけるまゝめく  
 籠輿ゆるは本瓜の山阿い  
 昔を覚えてるる子泪ごとあり一り  
 卒雲の人をゆるく本瓜の山阿いを阿い  
 神骨を見てりががほどあかくかたつらむと  
 かたつらめもつともあゝとオムルの人と  
 はつけ合ふや

けー尼の小坊まりふうちをきて  
 をる蓮の葉たぐは甚の疾  
 作さるるなり  
 豆腐つくり母の喪ふ入  
 えの草乃袂も破ぬぞー  
 海ゆ喪ふともる人を保るのえ取と見らる  
 附合ありえ取ハ母ふ孝あり人  
 ひとり書を考るる家の戸は中  
 二丁ほど西ふきぬこれきりあり  
 ひとり虫をよむるの戸ハ二三丁も村家を入



だてあるを

櫛の風乃豆がらをふく

寒き知小住持はひとり柿むきて

茶匂いよも葉さの質一げるやうき位  
持の柿むきぬる寒がさるがぬ

小僧あつりずかしまりぬる

新撰の陰書小あさみの酒をくも

素軒の和祥人小画をかきくあさみの名酒  
を飲する破よハ僧あつりずかしまりぬる  
玉山あどつ小大さのたまた

赤衣はまのををてるは笑ひやり

宮司が妻すべしはれられてりふ

前白と二人をへたる附合之前白ハ公の  
もちくく笑ひ一人は見ゆく恋すあり

後白ハたのきハ公のもちて笑ひををり

が妻小思はれたるとつよふか

入月千鶴のるはわ

駕なき園乃露負れゆ

いらあらむえめが

一輪笑一芍薬の定



其名の工夫二日守く。目を吹く

おもしろき附合之何ぐとよぶやほどの其名  
うちの人と半うちけく勝負いつの日之  
めむと契りちくやあかへり定のもとよまづ  
うみ居てんに驚ざりしを二日までユマ  
しやうく思ひつき。あみ目をひらき  
見れば定おのの首茶一痛嘆おくる  
笠おめて衣のやぶま綴りぬ。

秋の鳥乃人くひみゆく

け句や人を愁殺身山ほぐやなど

のかへをものとも思ひたらでまのこふらま  
しき破き衣は際りぬ。くもものを見て附  
た。之附ぐろはまばらくをて一句のやう  
秋といふ字のよくそりりた。はぐま  
はたしらりよほらざんがかる句をはくは

夷人のかさち抱むうげろふ

蝦夷の智耳奉来た蝶と身を焼く

京小名高し痛の呪



富士の根をいざ見く馬小舟あちがら

まこしきこえがこころいづれぞ強くいづれお白八奈

居て海の呪咀ふぬをほく人之後白うい

成増ぶこの富士乃根をいざ見くこころ

あちがらいぢやうげある男ハ京小舟なるま海

の呪咀あちがらこころあちがらむかぬ不た

やうあちがら

月あちがら桂のひびきハッるこ

棺いそぐ消ぐこの森

お白月もあちがらと西小舟がまきちまをまけ

ハッ時といふものまきけまきをよく見定めて

人の今死くる宿中たり

高野森の懸小島つらり

紅海の夜祭の千花のまを往り

何れのまあちがら附合をよべ

酒飲む姨のいふ淋一た

双六のしらみを舐にまつく

酒好の姨より舐のまあちがらまあつけらるま

のふれ双六まあけらるるけらら死一まき

何れまあちがらとむらふ人をあちがら君ハ



いづれをぞそののぐききえたる小娘  
と思ひやりたるはまり

髪下を侍位が娘をとりへく

聖の宮乃何ら一故王され陸

兼白ハ髪下一く嵯峨りりふかふるはま

と身くかきしゆにゆえ何の聖のまはま

さをつけたる人

養老者を留執名月の冨

面白の抱女乃秋の萩さぐらや

まの抱治郎六何らで風伝のたつ人乃

まの抱治郎

川瀬ゆく髪告を角小侍付く

舍利とる滝小粒日うつらふ

古洞ちりハ絆一がくまへく古洞もる古

洞ちちらぬ何里のちの洞も古洞何りこの境

よのりうつべ

洞瀬小洒をかく執様屋

ふよの女子髪カヒコたくりりり

いづれをぞそののぐききえたる小娘

思ひやりたるはまり

髪下を侍位が娘をとりへく

聖の宮乃何ら一故王され陸

兼白ハ髪下一く嵯峨りりふかふるはま

と身くかきしゆにゆえ何の聖のまはま

さをつけたる人

養老者を留執名月の冨

面白の抱女乃秋の萩さぐらや

まの抱治郎六何らで風伝のたつ人乃

まの抱治郎

川瀬ゆく髪告を角小侍付く

舍利とる滝小粒日うつらふ

古洞ちりハ絆一がくまへく古洞もる古  
洞ちちらぬ何里のちの洞も古洞何りこの境  
よのりうつべ  
洞瀬小洒をかく執様屋  
ふよの女子髪カヒコたくりりり  
いづれをぞそののぐききえたる小娘  
思ひやりたるはまり



三 船の船 河川乃 秋

秋のき原川の秋をきらぬバ解きよるるを  
ゆぎ

花 出<sup>カスガ</sup>あつる 叶<sup>カスガ</sup>るぎの暮る妻

いふ時百<sup>モ</sup>香<sup>ズ</sup>る吹矢を真あがら

田野之秋色

月ゆく折板山をるぎつらむ  
雨之ハ秋 益の法埋むあがり

大盗人の入りし夜あふべし何ぐ盗人  
の黨<sup>トウ</sup>をむきびく何ぐた司が家み入る

何く山を志えくちをむのものがりよる  
よの何よりある

ひと川兔の尻くらふきる

ゆきみちの人の薄ふとぢらゆき

たじくゆきみちの人の薄ふかくるいひて  
人あはれをいつりかききバ兔の尻くらふ  
うぎ

凡くらき大妻の秋七つ

川門をたじく生 狸の美矢

赤白大とりの秋後白ハえ日の秋附えハ河



里のまゝ之

宿の<sup>ミヤゲ</sup>ちぢぢ拵子をほる。

とちぢぢのまぢ歌す付く

拵子を<sup>ミヤゲ</sup>堀く宿のみやげふまゝ。人をまぢ歌

師と見まゝ。俯句之

くば玉の装まゝ。廿二夜にきて

まを<sup>ミヤゲ</sup>見まゝ。物ぐん月

くば玉ハ<sup>ミヤゲ</sup>秋とくふの<sup>ミヤゲ</sup>枕まゝ。思ま

らまぢぢぢぢぢぢぢの<sup>ミヤゲ</sup>舟にたらしぬ

のかまぢぢぢぢぢぢぢ乃乃が<sup>ミヤゲ</sup>思まぢぢぢぢぢ

でぢぢや何りルむといへるを思ひく<sup>ミヤゲ</sup>装ま

思まぢぢぢぢぢぢぢ玉の<sup>ミヤゲ</sup>装と依<sup>ミヤゲ</sup>借ふ用ひ

はくはく<sup>ミヤゲ</sup>俯ぐらハ<sup>ミヤゲ</sup>あう<sup>ミヤゲ</sup>ちぢぢぢぢ。廿の<sup>ミヤゲ</sup>夜

みまぢぢぢぢぢぢぢハ<sup>ミヤゲ</sup>かく思ひまぢぢぢぢぢぢぢ

たり<sup>ミヤゲ</sup>浮世ハ<sup>ミヤゲ</sup>たぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

に<sup>ミヤゲ</sup>たぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

一<sup>ミヤゲ</sup>まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ころ<sup>ミヤゲ</sup>たぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

の<sup>ミヤゲ</sup>まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

と<sup>ミヤゲ</sup>一念<sup>ミヤゲ</sup>みぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

たち<sup>ミヤゲ</sup>あぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

を<sup>ミヤゲ</sup>見まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

を<sup>ミヤゲ</sup>見まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

を<sup>ミヤゲ</sup>見まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

を<sup>ミヤゲ</sup>見まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ



はよちのりねがねとつよめくほはぐさのまを  
きくしたる

陰るを龍<sup>オ</sup>羽<sup>ゴ</sup>のかづらりりあ道

ひま指くもあふえる 渡 男

浦をの御<sup>御</sup>置<sup>置</sup>のりーたなるべー

うちかづくお糸のまをちあつり

たのきく 天と 巫<sup>巫</sup>買<sup>買</sup>ふゆ

まよは公羽のこもみま高き恋の句之まこい

恋の情をつくせりつよべーお句ハい

ものちよちのるをたぐなつーみといへるみ

ゆり何の川<sup>川</sup>持<sup>持</sup>どてみふいやーくらぬ人のた

いぶれいやーさものよぬひーたなるちた

たのく恋のまををのべた。えもいひ

でやー

入<sup>入</sup>月の何と乃星<sup>星</sup>あつらつ

宮<sup>宮</sup>さか波<sup>波</sup>持<sup>持</sup>つも 花<sup>花</sup>の 粟<sup>粟</sup>

星<sup>星</sup>あつらつたのよまごよみえうあたる

社<sup>社</sup>家のゆめぐれと見えくまおさかた灯<sup>灯</sup>の健<sup>健</sup>成

つぎよゆくまごをつける画<sup>画</sup>も及び

ス<sup>ス</sup>キ<sup>キ</sup> 層<sup>層</sup>をゆく いんふふた<sup>た</sup>り

上



取比ね巴有るく麻守よ入篠の隈

蓐を切て管にふくえき人の船より帆は

負おしく山ヶの篠の隈の隈子只ひとりかきあら

して麻の着をまらばま何くあでえきる人

ありら

侘れもしらく 櫛の粥者ある

更級の里乃きぬこをおふゆき

これもたなドえき人の櫛かゆ者ある俺お

あらばけりしちの石おふゆくもろづ

露を相成ほく 濁る馬の血

坊主ど者老ともいひで 追えぬ

土の餅つく 砂のりねろろ

三句ともちぢりりこのころちや

生篠に焼つく 煙るとなり

日くれて 赤る 松が 切け

山家のやうきくまがめ

ま白ち塔なた飯をつま向く

泪 顔をよぎる 目 茶

茶白痴者の藤治のため塔ぐらちや

見えく 目病成つけるをぬ



香根小念仏をやらふ居士衣

小株、稲の中ふつくそ

小株下の片まこ

枝でうつ産路が破上もあや

いぢまふびむや嬢族の月

昔カクふいぢりカクを對しける附句カクとれも又二株

な花は植根ウガな穿つウガ草宿

かげらふまきカケ糸カケの下カケぬ

身カケのうさも才子カケの足カケ徳カケよ春カケとちて

かげらふの句カケおの坊カケふのちカケの句カケ勝カケどカケてお身

しくきき人のされど一葉もちりける田かみんが  
才子のたまけよあひてからき世をのつた  
まにあま

和泉のかづら桶の名をとり

げ菜カケ植カケのあるきカケたハ破カケまカケらカケり

とを留意

土買カケもよむカケらりカケ桂カケハ黒カケ石

平カケ茶カケのカケ恐カケびカケくカケわカケきカケ。秋カケのカケ風

黒石の坊カケふカケあカケるカケべカケー

坂カケ友カケさカケ。宵カケのカケ月カケがカケひカケらカケめカケく



まじり西の吐乃松回し  
松友さる者の人くたしなむらびたる中  
か西国此のどをよくまゆりたる人乃ものがた  
きゝに松友さる人の下とくろ何りく松回さる  
はまこ

瀬ふ玉子ハ何とくあらむ

山菜の花の傍ハ水仙 梅 棗

二句ともあきまゝなるなりれどたゞひならべ  
たる之附合の中よハ必かたる句何るべし上を  
ハよくやりの句をさるゝとあはるたべし

雪ふ鞍れくハ貫が馬

やどり七む大江の岸ハ八るさか

雪に孫むよハ貫が馬ハ大江の岸ふやどる

雪に孫むよハ貫が馬ハ大江の岸ふやどる

割るらつ々 状 かの蓋

清 漆 叛も先 調りぬ 室は沙汰

おきろきつけ句之度くの状海ハゆき何

は人と見うゝらん 漆叛のお後とふさめさる

の清 漆叛をまこし ちよつくらバを

まじり 漆叛も金ふつまりくとの



いよハ階檐の秋趣あり

宜根ガ、<sup>マ</sup>まア、<sup>カ</sup>外も虚つく

花ごも里<sup>カ</sup>中<sup>カ</sup>も物<sup>カ</sup>を思ふらむ

二句意よていづれもを<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>き化あり句意ハ

きこえたるまのなる

森の柵<sup>カ</sup>ナ、<sup>カ</sup>鳥をたづめく

鳥の居る花は<sup>カ</sup>結屋<sup>カ</sup>とよめゆ

け句の<sup>カ</sup>つまびらやふ二十<sup>カ</sup>二<sup>カ</sup>条<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>づ

口をこづ

歌よをも<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ね<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>ん

有明の梨打を<sup>カ</sup>ば<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>送<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る

け句も公卿の名高き附句<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>前<sup>カ</sup>句<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>柏<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>る

のりくえもい<sup>カ</sup>ぢ<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>で<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>句<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>柏<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>る

を<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>句<sup>カ</sup>え<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>

殿さ<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>社<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>。 ね<sup>カ</sup>ば<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>け

え<sup>カ</sup>げ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>。 眉<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>づ<sup>カ</sup>

け<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>もの<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>べ<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>併<sup>カ</sup>と

除<sup>カ</sup>鞠<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>思<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>ち<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>

け<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>待<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>階<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>。 二<sup>カ</sup>葉<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>中<sup>カ</sup>

休<sup>カ</sup>鞠<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>ち<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>ぢ<sup>カ</sup>



思ひ予一なるはおもな里はれどはるゝはりて  
やうく陸のなるは子あめたるこつあそ  
の附合あり一白ハ陸を待て居たるが待ら  
ひ何れも待ハるもの中ハ階たれといふや  
ゆきとゆれどはよハ何らあぢた陸のなるこ  
とをやあ一といひのべたこと

京ハ汲まる 碓井の水

玉川や水のくくついの不見く

凡はのえきんとの水がこの水あをまて  
水をたのむ人之内きば玉川のこつまで

めみ一なるべ

餅つくる猫の廣菜を打合を

賢ニエ子笑を 秋乃とるハ

茶臼猫の茶乃餅つくるをあそやといと  
見くい子ええを笑する人の何れなるは  
をつけたり秋のんハ秋の字あれはる  
たろろをつくきり

姉待牛の一生まの親

伯何ハぬ越のキ織を織りぬく

姉のまきを待兼るをふのやうさで



扱ふむらひちあぐらお思ひぬるはまこ

誼のそすまて女まの道びおて

卯月乃雪を握るつくがね

前白田植のほまりあるみ雪を握るとま

りを何いーらひたると

田んぬ車をとくこみ 傀儡

舞申ふたくる車の心屋を控て

おまーろき附合之車の申ふぬる今お思ひ

の何る人あまが傀儡のこくま車をまきて

おーやりが女の上をとくこみま何らぬくと

乃まきくまづー車的心屋を控るとまま附

たりお思ふ人の本懐待うまかくのこく

志らむ

老の身此襪をふほどふほるめりる

君流りきー海の糸よ

前白老の身此ほるめゆへ老ながら襪をふ

ほどふおとろへくるひとくこあらざお思ふ人

と見く極老の糸さくーちあふ世の中こ

だれて君さ一流さ水ぬひー流の糸さくと

ま〜視をゆふほるめりるさ〜りめをま

新

三



らーちよえ

木の葉もちよの榎の葉も 沖に月

つゝけりぬる 崎乃くひもの

前白あざりー吹立榎の木の葉もたりにと

ちよものさきさきりーきを死ふと身くくひ

ものさきさきーた雀人の何りぬるさうをひ

たさと

心憂をくむささく 藤ぬりさ

火あけーて帰るをのさ何共さ

前白川びこのうひささきい屋敷あふくるまで

藤もやらざりてーさの心憂とあるふ子炬をど

ありて帰るをのさ何共ささきさきさきさき

たおあける何りさほ之山とえの炬、燈ひ

らひの炬なるをー

はまぐくのまけりさめり月月の歌

人一代乃、恋奴とふ秋

さほぐのかをさめといふすめ次、恋の白と

あーく月のおよむのくはむげものかあ

ーてたがひよをさなれたすめの夜をつく

まがひものがくるはまをたお法もかゝる付

付

三



何里かきしるき附合ありらる

下戸をにくめる雪の萩乃亭

早咲の梅はあふたと一ため

半白雪の萩乃亭に待たざつくり証さめ

はるが中ふたりにく戸たのるをのこをそめ

たりあや片ま次の白をそけく早咲の梅

を赤身ふたと一たのれとおのれ萩乃亭詩人

酒後の懐をいり

明安き萩乃亭まきらか後立ちく

あふよきを啼ゆくほくぎささら

あまをりきつけぐるく前白其の萩乃

明安き萩乃亭よりほくぎまをそめ

く後立ちより小情能くあふぬをくらき

うぬをかつ風流才一のほくぎ萩乃亭

くりく風流公おふらぎく後そや

あふよきをむけ名月をたぐよやハ

せむおるのそつぎ萩乃亭

あふよき名月をたぐよやハ萩乃亭

あふよきくたのどつあさきの懐白ハまぞよそ

あふよき候の若もちて萩乃亭とえり

所答

所答



はぐさきもさのりかしくぬる糸さるあんどそ  
はのみつぎばうりハゆるさくあらむとをうり  
いひたると

縮書の光くすまきバ筆投く

聖巾のりくれ 片襷をまぐ

糸白ハ指居るどーておろきぬるふ(縮書の  
光りすまきふゆるき筆をも投さくたすま  
かくあれど後白ハおろす中ハ指どく立と  
りく小片襷もぎくもどるほごのせつる  
あふまかへたると

ゆふ屋平 なるを借る 於人

命ぞとくふのまき哥<sup>つた</sup> 懐<sup>な</sup>平

附ぞろハ於のまき哥師の直たりりのな  
くふ下りくゆるんあるまき哥ーく著て於一  
ゆふおろりたる之はれハその自れまき哥を  
懐中くまことよわが命ぞとちりふうけ  
ははまこ

汝ハ干く 砂ふみく 復たの浦

日毎小かたる家をもあひく

復たとりより 保氏お復たのまきふか



の頂上ハむのしころ人もきみれ今ハ里は  
あはいところろがそくくたを何をもたふ  
ふくめよれははあくとも在ふのきぐこハかる  
ものぬり

と念<sup>ニ</sup>まとは樞の本乃中

聖<sup>ミ</sup>して聖<sup>カ</sup>なちがら此月もこつ

樞の本乃中ふまると念ハひろふそ念  
固の人ならむとかくつたる之西行の撰集  
抄などの越も何るべー次の句釋之のや  
ふいひけり聖法何とありしとて乃

中の月をもつと何とありて釋之釋之  
とゆゑやに何やありたる之世の依指を注  
するものかゝるのりをも何くの釋之何くの  
釋之などはあぐふ解まぐハ依指ーらぬ  
もの、志りぎあつりもーけ句よもせよまことよ  
釋之釋之とをばうんハ釋之釋之とをば  
礼依指ハ何らうーあはなかぎらざあや  
あなどをふくめよ句やても底ぐるふたが  
けく付のゝあよてまうをうーんらうちつ  
けるそのさきゆをいひてあたらむハとが



くちぬるべし かくるものいふお時るおしつるも  
のく從論ふさきくいつ

目茶のりーたそのまゝ 詩よ伝り

ハッふあゝる子乃 顔 清げなま

まじくふけつけ向まても何き目茶のり 詩を

たちあち 詩よ伝るハ才子のわけと見て 玉戎

たのどのり 伝るハふくめれどこののりハぬく

ともささるゆゑや につりたるものなりたと

けつけ向 目茶のりーををろのまゝ 詩よつる人

を大人うしとハをりーからハ才子の小見と見

たのふゆ之心をつくべし

小 細 内 びーた 案 山 子 他 ら む

るよの戸れ馬を 酒 僕 ぶ ね さ へ ち れ

ををり ぎ 附 向 ぬ ころう 何 基 茶 向 の や

き 風 粒 の ま ぐ とも 見 くと 加 ぎ り ぬ き 豊 家 飲

秘 造 の 人 を つ け くり 日 々 数 升 の 酒 を 飲

く くる 此 價 銀 何 が ち り 子 ち ら だ つ ぬ ま へ

の ち の よ 馬 を ね さ へ とも ぬ る 之 世 を 恒 壺 の

向 ぶ かり ぬ 秘 ぢ け 人 ち ら ぬ べし

臣 ち ら や ち ら 居 ち の な 小 ち ら り ち ら

御 命 此

三 廿 八



心代小出く 海苔 さらさらふん  
糸白世の中乃 俗物をきけくろろりある。  
ものだくりかえれ家小 徳り何ふれまをきん  
世のなつひたる。之を是世の家にてせひ  
けきふたへたへる。るり何りかぬくハるのん  
をもふくあり 後白ハ水色ふ水色をうりて  
たぐその以時ふを何はきるのくふさ  
んちあし  
糸白の音 ずちがら ちあしびき  
月をほし 螺 ウガイ の 証

糸白の音乃 大なる音をうても 高きり  
む高軒かきく ぬり居る人ハ 鳥羽の徒  
の碎石と見え 螺貝よて 飲やしたる大  
たまをつける之志あり 糸白あしびきと何  
まば自の句よて 碎ごころよりつらくと 糸白  
の音をきくおしと  
辛螺がらの 健流る 落氷  
角何る 眉小 化粧 する 表  
法少納玄の 控まぬのふまきと何じきも乃  
老のけりといひし たびひりつけごころばご

海苔

螺



うたふらむ

舟 さま 采の 出敷 川口

標干小 頤 オトガイ ちりぶ 夕きをみ

お白の 垢ふをきぐふつけく スイロウ 水橋の 標干小

頤うちちりぶく 川口の出入船をちりぶめぬ。

けしき

初月小 外里 ナカサト の 娘乃 川面ひ

房ハまねく 荊 被ひく

娘の川面ひまをるを 采の及く思ひやを

一房ハまねく 荊被ひく 娘の川面ひま

なるべしをうき 借替のつけ白く

わくわく舟ねも ぬ方小 山さえく

待いくところ 西々 東々

采の山河

涙をろえく 鄙の 橋お

採なけづる 態の 採乃 名もつらく

采白採ちがらみ 採お一首よみ見る 鄙人の

情乃せつなるに 採白ハ 採のこの 採れやみ

采とて 採の 採乃 名を 採の とつふもつら

一とくかく 採おふよとたは 採まよつたる

舟

上



たり

くさきまをぬてくさきもぬるぬ

父乃軍 成 起ふー のるな

くさきまのくさきもむなしくぬるくさきも父  
ハ軍ふ出たづられたのが身ハ痛ふく父も  
まづぐふりあらざくちをく月日なつ区  
りく起くもあくも父の軍をつるなる  
孝子の情をつけく

三度 ぼー たれ 勅キツのちま

山が車ふけづる本をそひ

かれふ酒何とくさきものりぬふちかたけ  
を三度まづぼーぬるふくすのくさきなど  
思ひよせて山がふたまりりくさきとつけく  
度ぬく月ハむりーの氣なから  
老むくむが衣くつ ちる

前向ハま梅花の巻乃ねもくげをもふくめ  
の後向も艾切之

道のをこれ松ふー喝イッ志めー金

長者の 輿コシ年 習ナをちあげとむ

前向ハたくまき 経僧と見く 長者をもの



の教ともせむ。鹽ふ習を投こしたる。粗候  
此まがごとくをつけり

廿ツク爨クラふ 短冊つけく 於やり

ゑ 盃を 脊負 けぐ 辰

つばくらふ短冊つけく 放ちゑふ盃をる

ハと何ぐ 大主などつふもの 捉びたるべ

し されも 傍の 對附なり

翌々 強たつらふ 定ふすらばや

お 控ふる 乃ま くの 粟の名を とき

附ごらふ 粟を もらひ 隔る 乃ふ 翌々の ぬ

乃ま くの 定ふ ちより たる ぬる 旨に

大 くの 粟の名を 忘れたる 之前 白ユウ優エイ艶

なる ぬふ 次も やら しく つけり

酒ふ ぬふ 何る 友を 向つめ

ぬ け ぬる 又の 一 止 函 乃 かな しく

は つけ 向 ぬふ ね 不 ぎ 換 あり 其 向 八 ね 道

ろ 酒 の ぬ くら 人 なる せ 川 樽 下 てる 各

止 齒 の ぬ け ぬる かな しく つけ ぬる ぬ 是

は ぬ ぬ ぬ 理 あり ぬ 又 の 手 賀 或 八 ぬ 下

た ぬ ぬ ぬ ぬ 又 の よ 八 ぬ の ぬ ぬ ぬ ぬ



休をかきめり孝子の懐之かく茶句ふつ六  
れを引と取りつけるは名人の手段あり  
まこのれども勿論茶句の挽採時のよろ  
たふまゝさぶな

山さるハ登も 狐のはまぢも  
花とひ束やとほつらほら

登も狐のほらがるさるハのやど山ふつさ  
見く花ふ人のとへくほつららむと  
つよつけ合之茶句のころよて山さるハ  
のちひはさるとさるも後句より

借ドく大地の山さるハは  
白きお蝶の垣を 飛らさ

借らめを標の 根ふゆめ遠て  
茶句春日のねどなるにひらくハお蝶の  
垣を飛らさけまをそらあど見くよま  
日和哉見おはせて借りり衣あらひあ  
女のまらげをつける

細なた記念の報 するも出さ

何も 焚火ふ皆つら  
茶句ハ天報といつる 信もの付く後句ハ人



のちくけりるにのり小あよらまらうか  
はあり

供<sup>ミガ</sup>指<sup>キ</sup>ゆーまの最<sup>キ</sup>陰

本<sup>キ</sup>免<sup>ツキ</sup>のたのが碓や留ぬらむ

たぐその垢ふれ附合之本免の茶を碓ふ  
ーあるあ小階督

方<sup>キ</sup>りりの侍<sup>キ</sup>中<sup>キ</sup>おにくまんで

焼<sup>キ</sup>こぐーたる小<sup>キ</sup>樓<sup>キ</sup>もろけを

ぬくめ子の情をつくーたり平生に教多く  
おひひけいであどーく侍<sup>キ</sup>中<sup>キ</sup>にうくまをい女

のたましく小<sup>キ</sup>樓<sup>キ</sup>燒<sup>キ</sup>こぐーたるをきみくのさ  
ふいひたるるるるがぬー

船<sup>キ</sup>追<sup>キ</sup>のけく蜻<sup>キ</sup>の喰<sup>キ</sup>飽

さるるハ阿らぶる神乃まろつ

ともよるりーまりまた其扱の何りたま  
世にハありるる

おおとさ白<sup>キ</sup>田<sup>キ</sup>も花<sup>キ</sup>の本<sup>キ</sup>陰<sup>キ</sup>よて

つらもそつお小<sup>キ</sup>露<sup>キ</sup>の卵<sup>キ</sup>わる

春<sup>キ</sup>るるこ目<sup>キ</sup>茶<sup>キ</sup>とらば身<sup>キ</sup>二<sup>キ</sup>葉<sup>キ</sup>よあべー  
夜<sup>キ</sup>是<sup>キ</sup>たろくおくそ持<sup>キ</sup>の上



ともーびの糸めづらーたきのえ結  
 と持のよ小敷思たみあしく藤もさぬやう  
 衣をそのえ結と思ひよとくるこ  
 いかやうの束も走つべき存実  
 理比 聖世をかえう、出るあお  
 古ものかごりよもほるべきねもくげを思ひよ  
 せしく理比世をかえしく糸持より出る人  
 ハ何ぐーの君乃いろそのこたのどー  
 心陰ふく下るんおねおの坂  
 宗長の真実寸 白も筆の條

附 意きこえるやまて一海ねごやうならず  
 綴 強き袴小秋をうちねと  
 聖 實の白髪を以て見付たり  
 前句 袴の綴乃強きをうらめるとつ小を杖  
 の字ふ心をこめく衣の身ふるぐハぢむつ  
 しくねがゆか人の老るるちありとつあふりて  
 たドめく聖實の白髪を以て付て老を解ま  
 のをつけり  
 わが顔ふせぬりりたるおまの花  
 綴 子お縁とつアーさうづき



紅葉の花のちよひ極まりきり。人あらば故様と  
 いへる盃ならむつけ白のひびきおとつ子登しと  
 てハハ係の他名あれはいうももなづくべき哉  
 故様といふよて紅葉の花のちりかきりた  
 ころがやー美ふふりく味ふべた附白と  
 紅葉のちよひ極まりきり。人あらば故様と

粟稗を日毎のナキみよ喰ひ飽く

ぬよといふ一字やて僧とさるせりもとり  
 も持身の行あれはいうなる。いなる。ふよも  
 つるべりいどきまでなる肉身あれはかきくる

里ふくろとまらぬ毎日の粟稗ふくむド  
 果々いけまいとをう

け秋も山の板橋カッあはれり  
ナキぬふもゆくひとりくる月

赤白のちよひ極まりきり。人あらば故様と  
 いへる盃ならむつけ白のひびきおとつ子登しと  
 てハハ係の他名あれはいうももなづくべき哉  
 故様といふよて紅葉の花のちりかきりた  
 ころがやー美ふふりく味ふべた附白と  
 紅葉のちよひ極まりきり。人あらば故様と



お向むのハ抱女町まゝに  
 不も今ハ名のハありまゝに  
 お撫り星うつる内まを見く  
 たまりしとつけくる之廊に  
 びさあり

まの雪ふ先何れとや金揚て

麻巻あがらふ化粧つと

茶白かこひなきふ何つ  
 たてたる雪のおあまがけ  
 何くらむとくを何げてす  
 りかりとるん流

の席を後向依の川村ト  
 抱女乃於屋と一合とつけ合之

鯨牛の志を踏つかき  
 身ハ様此何なるといふや  
 ちんらら志と一合をいひ

いひのべたり惜牛の志を踏つ  
 と者小踏手たる之様の何なる  
 ぬたつ敷月を何依れそ見て

出 澄泉 俣奥の社凡

らんも壺ふるのりをつけるま



ちり

何の時ハ解ももるの入ぬらむ

樟の小枝小葉をへた〜

氣向うき夜小思ひ〜づみ〜樟ももるの  
入はぐりある〜之後向ハ解といふ小樟をつ  
け〜恵をいつ〜ひたる〜

霜降 山や 谷谷たもうげ

隔もりの軍をささる〜外よ来て

山ふもねのり〜何りはまふ程の面影の  
さ〜ちりといふささる〜げたる〜

をろのま〜つ〜軍の出立を〜

り〜り〜の隔もりさる〜

冬引 雪車ひ〜め〜

木の〜 武士は冬〜宿

赤向ハ小越ホクエツの大雪ある〜

城を攻むと大軍たろひ事〜

小馬の蹄ヒツメ跡さ〜も何ら〜

此冬〜り〜て〜

宮小石水〜

は枕干〜

附録

七



お向おむけちやくまの池添部をゆるらん  
まぬらさし女なり後向ハそのまゝくその  
めくりりなき契のほど何れん

住かへる宿の柱乃月を見よ

二階何くらむといふ条が終は

いふもも解が

ち山つゞこの志年ホーどる

淋しさを洩るもきく来まお

附向もつけまもきとえと白ま之冬枝と

ありハいほ入る人もなくち山つゞこのこ

つらあふ

花をたふす花れをみちびきて

酒の迷ひ乃片むる春風

前向ハ馬ふまろく花れと人を送るはま之

後向酒の迷ひの片むるたが碎の片むる春

水と花れをみちびくとつお小迷ひのさむる

とひぐもたる之ちろをつくべ

馬市くハく狗むりへさむ

傑ける父が弓ユミ箭ヤをとりつこへ

附ぐろ馬市ハ出るほどのものハ弓箭もつ



なまきいりぬなりぬど駒むりへよいつもくし年  
久しく出る男かてい父の代より徳ゆくる  
弓の糸をも持つてたる古き家あらむの  
雪降ぬ松の枝とふゆりる  
秋 踏 去ける 杖 乃 妻  
糸白何りのまゝ之後白も消き山と見てい  
のーと思ひよりたりそ杖ふむとつふゆり  
妻と逆て志ゆつをきる之にろろーきせぐ  
ものをかくやちーくつくりたる名人の殿  
あり

底 洗ハむとまあるくぐあり  
おの花の今ハ衣をいそをぬー  
い々たる附ぐるるや  
牡丹の七下 風不のりあり  
老僧のいで小盃たぐめむと  
お白圓の牡丹乃夕や海をふくめるふく  
ろよき風たろぶく吹けーきいうまもた  
の庭と見く牡丹見の徑もゆをつける  
秋更く枝子小かちむ若のい立  
くくひままきるのみ波の谷程

新古今

五十一



持子の何ごころもななくく喉に哥うこひす  
ほちよのりれあふはまをのづくるつけごころ  
ならむの

此株のさるふ見ゆる篝火

寺執供の著も 疎よく

市株のすろ小見ゆるは再供の著をとるな  
らむとの附えふや

牛の子ふあゝるなぐさむ夕暮るん

る雲まよふとくろあ 嘘

さゝえがくしきひくさむとまらばれろらく

ハヒがきくせむ

松むさをびたしく 玉の境目

永楽の古きさる領をいたきて

永楽の代よりお朱取たまりめく寺領

テウザイ 伝載のさなるべし 附えはきくえたるま

ちあり

捲上るは屋ふ 兒の遠入く

わづらふ人平 昔る 秋風

二白のユ合漢も落ぬべし 戸を捲上げ

兒乃遠入にちちの母をどのやこや



たるに秋風をいそひたるはるの  
 豊 船いとちむ山信乃塔  
 様 多村ハ浮世の印は春まで  
 除さるるをいそひたるはるの  
 星 みるる影にふねのかけると  
 まお 月 花女の名をとむ月  
 花 白ハ星みるるわき人ふかきくらげ花にさ  
 影 影のかたまりまじくみるるは後白ハ七夕みるる  
 るく 舟よと或ハ古人の舟をもちて何とぶま  
 のちんばまふ出くる花女の舟は若菜

かついやーき花女よと舟をよめはまふも  
 入りく影をとむむよとくらげ花にさ  
 ちのよべー  
 はまふふ出くる家路忘る  
 影ふく咲本信を屋のわげらひ  
 けのむねりな  
 雪みるる沙をの市は名跡とて  
 傳いその日を 屋のあ  
 傳いその日ハゆふ居てもはるごとと屋ふ  
 ちめくうのちめりハ伏階の連年とて



つゆものなるべし 俯さるるにぬらうと  
 やまめ 鳥乃 暁 暁 暁  
 平つゝ 聖も 越屋き 花の峰  
 俯意ハ長 詠のりよもたれて 聖ハ又づづの  
 つゝとこの山 峰をこえむと 思ひやふたふ  
 うちのさるろーく やまめ 鳥の 聖をさして  
 まりづめま子を おきき 妻よたふりて まり  
 ありたきむくくくくくくくくく 詠のゆよ  
 ぐれちのらむら けれど 花の けちの けちの  
 ちうくま けちの けちの けちの

おしく 小 眼の お乃 指つゝ  
 後 年 一 つ 表 裏 けらひ 顔

これも 傍の 翁の 俯合之 茶向に かげり なるま  
 眼とま 指つゝ だうり なるを けらひ けらひ  
 ハ けらひ つけ けらひ けらひ けらひ けらひ けらひ  
 敷く の 眼を けらひ けらひ けらひ けらひ けらひ  
 けらひ けらひ けらひ けらひ けらひ けらひ けらひ  
 乃よ けらひ けらひ けらひ けらひ けらひ けらひ  
 蝶の 羽を けらひ けらひ けらひ けらひ けらひ  
 春 ぬら ぬらなるる 見が 後めく



前白やあしく何りぬあるふと見しく見ぬぬ  
 ろるも音とつ舟たり 鎌幡の乳小兒をすえ  
 く利カニ力カニいつら吉反情いふありぬあらは  
 らむおくらま毎片一降しく志めや。あるふ  
 見のまに後りぬまづくと泣ざらむかぬて  
 ハ鎌幡の乳小兒の羽をくむを思ふぬなる  
 海はたそへたる之  
 御遊カニハそのあなたままで切せげぬ  
 松りさ松くは 衣 徳のちカニ産  
 何りのまゝある 御合ならむ

ちまゝこの外ふいのかぬこと  
 御供カニく南あきそおも思ふならむ  
 お白カニいそゝとふまゝしてけぞろハカニ産  
 などの件あらむ君の思ひゆきあふふに  
 志さぐひて君の志乃らや海カニさふ南あき  
 子カニあゝまでもたづりく志のびくこそさから  
 へたぬたりむれいひたるさまゝさゝめ  
 乾づゝの妻カニ帯カニさの産乃々  
 りふも命と 時乃 とき  
 前白の御合なるおづゝのふらなるにま



侍の志年乃きこゆるふききたを親にて時  
と名のりゆも何とてと何ふた下のびらむ  
とつり水とたるるひを上げたるなるや妻帯  
さを時と見せる附合之

お月乃の鳩乃藤ふの月  
ものいへばお意ふびく春乃風

はきこえたるのこきこゆる  
糖をねきむる 鳩の何らせ  
おをねいすしなき志を化糖らむ  
附ごろ人を埋める鳩の何れおらむ

幼おのねくを見くゆしなき志ふおの  
おきこくうつらげよけりおらむらぬ  
あふ中くふかあしけのまらるなるん  
へはよや

お立しめむ唇を懐ふ生をて  
月乃へ 濃き 陣中 の市

お白お立しめて料理まを唇を懐ふ  
ひけまこく懐向むづらなるや  
あふふおらむ 陣中の志おらむ  
はたこらたこ



小徳勝を贈る戒の師

わがほむの母小似るもゆりて

赤子のヒユカガ戒に小徳勝まで戒師よりかく

ままをこころにかゝるおちどよつぐくそんが

わがほむの親の母小似るもゆりて人徳

をつくきる附合あり

あふらの束おつてたる古今集

花に射きよふ坊の酒花

前白うらもあふらにさき古く集も

何るぞし附どるらそめちと集もち

たるはあふらの坊と見く花の流ふ坊の酒花  
をさひらくそ

蚕コだぬ糸きくい第ちよい糸

縁木をつくりて古た糸を見む

蚕コ羽さるふをみちのくといひよをてふ

一のめく縁木をつくりて古き世の糸乃

はまを見さたといふ附合あり

眠いハい豆の降りふいまぬきく

百里の旅を本曾の牛追

目前の旅終



豆くくぬ杖ハ何とちかく思

古の祈を寺ふちなる ヒツダブキ 松皮草

古は不致さにぬしたらむハさハめくもの

まどく思もあくらむお白ハ帯ハの杖の

外ハ思ハ何とふ子てなるらむくの借穂

月見よと引起さハく恥一さ

髪 ウスモ 何ふがさるる 髪 モ の 髪

前句をよりみたる人をさばりりど

たあきものうハちりー起く月をも見ぬハ

トとゆきりたはれゆるるハ恥一さ

後句やどくなた人と見くのでたきハま  
をつけくを

白的協の末年 咲る山吹

春を經し七ツの季乃ちくら石

七ツの季乃ちくらためしふ引よる石のを

とあふぬりても忘れを思ひ出さ存なるべ

しちくら石的協の何よりハ何よべさはま

なりよとべくかふるころハ衣家よハくあ

るの的協とつふよくつけり

かさ消るるなハ聖中の地花よて



つりしとさるる山たの七年

前白ハ燈中の地蔵の妻小あつと子  
階替あり後白ハ燈宿たどしたる令  
見くくの附居之

鳴子様、ろく片ノ救の定

盗人ふつれそふ姓ッ方を位て

前白ハよのつぬれ田舎のはまなるをり  
標トく盗人の宿の鳴子小志うへたるつけ  
向ありあつるたらだ盗人の妻とありて  
身をくすゝあると入何り小むべし

秋の墨待の宿 緬ハ誰

ものいハ小いふ類をたしい

前白宿緬に秋の墨待かきたる風流の  
まぐさたなま志りる人乃面氣ありどた  
しふ誰ともけーがさきやうさを後白小  
てハ志でたものいひけしれまことふ志る人  
りしと志びし小いふ類をいれて志らぬ  
かふもてあしたむりくはまこ

盗人といはた二十ハ一の里

松の根小い及をたあらべくまらむ



前句何となく水どとろくの里といふ名の  
何やしたま盛人のをるべきふとくゆ後句ハ  
まなきちろのたろろししたふよふ十た  
いふもの、寝宿してことふたうの秋とい  
ふよて一いふといきやうま見えたり

何の月も意ゆきふとろ然しは

主海ともささえぬ袖のいさきに

意のまことをつくさる附合之意何れハ  
こそ月を見てもかたしは月といふ月  
主海とつけて主海ともささえぬといへりかほ

衣をさして、怪き世の中

酒のめバ谷の朽木も 佛あり

句の朽もてハ衣をもうちまて、ものめもかま  
ハぬをことを殺魚の証候と見く酒に研  
たる目よハ谷の朽木も佛のやうにみまど  
いへる附合ありとて意づくろハ衣をさして  
世の中を醒くさまむといふハもとて心何  
をことば表のつりねどたること朽木  
佛ありとつけるおくのま段たろるべ  
洞ホウの地チはハたタふフらラ純ジュンるルみミぬヌ



昔の菊の穂の涙や深つらむ

山陰葛原

冬を隣く 流人 某州

くも又昨日をねむ石のくへ

まことふけつけ白涙を流すべしとくむと

まればかへつく意取換ふく<sup>モクニキ</sup>悲儀共

登一

芭蕉公羽合集評注上巻終



